
夢見亭のお嬢さん

いちかわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見亭のお嬢さん

【Nコード】

N8863T

【作者名】

いちかわ

【あらすじ】

「君に次期女王として、王宮に戻ってほしい」

「冗談じゃない」

「私はさいごまで、貴方に対する責任を負い続けると誓う」

「それはつまり、私の下僕になると言う宣言だね」

歪んだ王国を正すため、若輩者の宰相が立ち上がる……ハズが、気が付けば何故か王女からの下僕認定。

ヘタレの宰相とオレさま王女が動き出す。

国の明日はどっちだ？

※少しずつ改訂が入ります

登場人物（前書き）

登場人物が多くなってきたので、まとめました。

登場人物

登場人物

名前は登場順です。

◇夢見亭

丁子

(ちょうじ)

真朱に雇われている侍女。

神鳥 藍

(かんどり らん)

真朱に雇われている侍従で、護衛も兼ねる。

倭 真朱

(やまと まそお)

夢見亭の主人。

◇夢見亭その他

白磁^{はくじ}

家令。青磁の弟で妙の夫。

浩伊^{こうい}

料理人。

妙^{たえ}

用人。白磁の妻。

◇伊勢家

伊勢月白

(いせ つきしろ)

伊勢家の家長で倭の宰相。淡藤の兄。

伊勢淡藤

(いせ あわふじ)

伊勢家の次男。月白の弟。

伊勢仙斎

(いせ せんさい)

月白と淡藤の祖父。故人。

◇伊勢家その他

常磐とこわ

月白の侍従。

雲井くもい

家令。

◇王宮

王弟

(おうてい)

女王の弟。

和泉蘇芳

(いずみ すおう)

王弟の息子。

倭朱華

（やまと はねず）

女王の娘。故人。

倭松葉

（やまと まつば）

倭の現女王。

◇王宮その他

かしわぎ
柏木

王弟に仕える密偵。
かすみ

霞

密偵見習い。柏木の甥。

◇大臣

さがみ
相模

侯爵。元議長。

むつ
陸奥

外務大臣。

しなの
信濃

教育大臣。私塾の塾長。

◇その他

駿河浅葱

(するが あさぎ)

女王の甥。

青磁^{せいじ}

浅葱の侍従。白磁の兄。

はじまり（前書き）

初投稿です。どうぞお手柔らかに。

はじまり

ガラガラと大通りを疾走していく馬車を避け、腕の中の包みを抱え直す。

主人からの頼まれものだ。落として汚しでもしたらことである。

丁子（ちょうじ）は今年十五になる。この大通りの先、王都の外れにある夢見亭で働く侍女だ。

もとは王族が所有していた離宮だが、二十年ほど前に払い下げられて現在は夢見亭と呼ばれている。

「丁子、丁子！」

通りの左右に軒を連ねる屋台から、威勢のいい声が丁子を呼び止めた。

見れば、八百屋の女将が麻の袋を片手に彼女を手招いている。

「こんにちは、おかみさん。何かご用ですか？」

「そろそろ通る頃だと思ってたんだ。これ、持って行きな」差し出された袋には、ジャガイモや玉ねぎ、ゴボウなどの野菜類。言うまでもなく店の売り物だ。

女将は丁子を通りかかる度に、こうして何かを持たせてくれる。

「いつもありがとうございます。商品なのに……」

「いいんだよ。このところ、商品の値を上げちまったから、売れ残りが多くてね」

「値段を上げた？」

「税金が高くてなあ。こっちも値を上げなきゃ利益にならねえんだ」丁子が首をかしげると、隣で話を聞いていた乾物屋の主人がそう教えてくれた。

「税金……」

「そう。まったく、政治は何をやってるんだかね」

「仕方ねえさ。近頃じゃあ王弟殿下が議會を仕切ってるって話だ」
女将は麻袋の口を縛って丁子に渡し、ため息をつく。

「陛下はもう高齢だしねえ。逆に宰相閣下は若すぎて、王弟殿下の言いなりなんだろう？」

「だからって好き勝手やられちゃ困る。ウチは魚なんか扱ってるから、シャレにならねえよ。大体なあ――」

長くなりそうな気配を感じ、彼らから一步足を退く。

夕食の支度もあるので、あまり油を売ってはいられないのを思い出したのだ。

「あの、私そろそろ」

「ああ、夢見のお嬢さんによろしく」

「はい。野菜、ありがとうございます」

一礼すると、丁子はまだ話を続ける女将たちを残して再び家路にいった。

廊下は原則早足で

個人宅としては不用心に開放されている夢見亭の門を潜り、まず丁子は野菜を厨房に届けた。

そこで主人の居場所を尋ねれば、午後は部屋から出ていないと言う。

「ついさっき、藍さまが茶を取りに来たところだ」

「もしかしてお菓子も出しました？」

麻袋を厨房の隅に下ろしながら聞くと、料理人がひげもじゃの顎を引く。

「ああ、もう。こんな時間から間食したら夕食が入らないって、いつも申し上げてるのに」

この屋敷の者は皆、主人に甘い。

丁子は頭を振って厨房を飛び出した。

夢見亭は四角い敷地の中、南向きの庭を囲むようにいくつかの棟が建てられている。

厨房は西北の端、主人の部屋がある棟は東南の端なので、狭くはない屋敷を対角線に横断しなくてはならない。

ややもすれば駆け足になりそうなほどの早足で回廊を歩いていると、建物の角から桜の木が見えてきた。

数々の樹木が植わる庭園でも、ひととき目を引く桜は樹齢二千年と言われ、夢見亭の名前の由来となっている。

今はまだ季節ではないが、春になれば薄墨を広げたような花が咲くのだ。

角を折れて東棟が見えたところで、回廊を行く背中を発見した。

「藍さん！」

呼び掛ければ、盆を両手にした男が振り返る。

「丁子」

駆け寄ってくる丁子に笑みを見せた男は、神鳥藍（かんどり らん）と言う名で、丁子と同じくこの夢見亭の主人に仕える侍従であるが、他の用人とは少々毛並みが異なっている。

名前や容貌は間違いなくここ倭（やまと）の国の人間だが、身にとっていているのは西の国の者が着るような黒服。そして、藍は異教徒だった。

「おかえり、遅かったな」

「八百屋のおかみさんに野菜をもらっていました」

「気前のいい女将だな」

象牙の留め具が二つほど外された胸もとに、信仰の対象だと言う十字の首飾りが見え隠れしている。

何度か教義を聞かせてもらったが、残念ながら丁子にはよく理解できなかった。

「藍さん、この時間にお菓子なんか出しては駄目ですよ」

「あー…腹が減ったって、うるさくて」

藍が苦笑して視線を下ろした。

紫檀の盆には、茶器と饅頭が載っている。

「夕食が食べられなくなるではないですか」

「お前は母親か」

「誰も言わないから私が言うんです。藍さんもしっかりしつけて下さい」

「まだ虎をしつける方が簡単だよ」

おかしそくに肩を揺らした藍は、それでも菓子を下げる気はない。

主人の意に反するのが嫌なのではなく、ただ何を言っても無駄だと分かってからだ。

それでも言わなければ気がすまないのは、丁子の性格だろう。



「真朱さま、丁子です」

扉の前で伺いをたててから、丁子と藍は東棟に入る。

主人の私室と言える東棟には、居間と書房、寝房に控えの間の四部屋があるが、たいてい主は居間にいる。

入室してすぐ目につくのは、床や机に積み上がる書物だ。

足の踏み場がないと言うほどではないが、それでも片付いているとは言いがたい。書物を左右によけ、歩き回るための細い道だけができていう状態だ。

その道を辿った窓近くに置かれた寝椅子に、夢見亭の主人はいた。

見た目に騙されるな

絹の張られた寝椅子に、これもまた絹の衣を敷物にして、屋敷の主である真朱（まさお）が転がっていた。

長い髪を結うこともなく高価な衣装を着崩し、色白の脚を惜し気もなく晒して書物をめくる様は、物事に頓着しない主らしいと言えなくもないが、どう見ても淑女の姿ではない。

「真朱さま！はしたない格好は、おやめください！」

すぐに丁子の非難が飛ぶが、真朱は腹這いのまま本から視線も上げない。

それどころかふてぶてしく茶を要求する始末だ。

「藍、お茶」

「はいはい」

「藍さん！」

いきりたつ丁子を笑顔で宥め、藍は机に積まれた本を床に下ろす。

そして空いた場所に盆を置き、給仕を始めた。

彼がのらりくらりと制止をかわすことは、今までの経験から分かっている。

しかし今日の丁子には切り札があった。

「真朱さま、こちらは必要ございませんか？」

大事に抱えていた包みを示して見せる。

「塾から借りて参りました。真朱さまが読みたがっていらした本だと、先生が教えてくださいました」

「貸して」

よほど気になっていた本なのか、驚くべき変わり身の早さで真朱が起き上がった。

「先に衣装を直して、きちんとお掛け下さい」

ぴしりと指摘すれば、真朱が渋々ながら裾を引いて脚を隠す。

延びてくる手から本を遠ざけ、丁子は更に条件を吊り上げた。もとよりこれを狙っての“餌”である。

「お菓子もいけません」

「それは関係なくない？」

「先生に無理を言っ借りてきたんです。汚すわけにはまいりません」

「こっちも無理を言っ作ってもらったんだけどね」

「では、こちらはお預けですね」

包みから取り出したのは、表紙が革で装丁された分厚い書物。

丁子が通う私塾の師が所蔵しているもので、真朱の代わりに借りてきたのだ。

「どうします？ お菓子を我慢すれば、ひとまず夕食までは読めますよ」

「………」

「…真朱、俺も饅頭は夕飯の後の方がいいと思うんだが」

しばし丁子と睨み合った真朱は、藍の言葉にひとつため息をついた。

「藍、お菓子は下げて」

「素直で助かる」

「うるさいよ」

悪態をつきながらも、彼女は居住まいを正すと丁子から得た本を開いた。

近侍の二人は顔を見合わせ、やれやれと肩を竦めた。

世の常などどこ吹く風とばかりに振る舞う一方で、理かなわらない行いはしないのが真朱という人間だ。

屋敷内でどんなだらしのない暮らしをしようとも、他人のものをそこに当て嵌めることはないように。

「ほら、お前の分」

「ありがとうございます」

真朱から少し距離を置いた卓で、丁子は藍と向かい、茶のおこぼれに与る。主人を前に堂々と茶を啜るのは本来礼にそぐわないが、真朱が気にしないうちにこれも夢見亭の慣習になっていた。そもそも、屋敷のどこへでも顔を出し、用人の部屋で花札片手に賭け事、などということをやったのける少女であるから、これはもう仕える方が諦めなければ仕方がない。

だから余計に、真朱の行いを咎められる丁子が重宝されているのだ。

「お菓子より優先したいなんて、あれは何の本なのでしょう」

「俺に聞くのか？ 借りてきたのは丁子だろ」

両手で茶杯を持ち上げつつ尋ねると、呆れ顔で返されたので丁子は唇を尖らせた。

「私は貸し借りの代行をただけです。内容も倭の文字でしたら聞きます」

「ああ…」

納得して藍は真朱の膝に立てられた本を見る。こちらを向いた表紙に綴られているのは、倭の国で使われる文字ではなく西のそれだった。

「……まあ、楽しそうだからいいんじゃないか？」

口許に笑みを浮かべながら項を繰る真朱から目を外し、藍は丁子に饅頭を押しやった。

「これ、冷めないうちに一つ食っておけよ」

「あ、はい。いただきます」

侍女や用人たちの食事は真朱の後と決まっているし、それまでに仕事もあるので丁子はあるがたく饅頭を手を取った。

「そう言えば藍さん、真朱さまより虎の方がしつけ易いって仰いましたけど」

「ん？ ああ、言った」

「それ、やっぱり真朱さまの方が簡単だと思います」

「ふふっ：いや、結局のところ丁子は――」

言いながら茶のおかわりを注いでくれる藍に頭を下げて、冷めかけた饅頭にかぶりつく。

そして、

「うぎゃあああっ」

絶叫した。

辛い。と言うより痛い。

真朱の吹き出す声が聞こえたが、それどころではない。

丁子は藤の椅子から文字通り飛び上がり、転げ落ちた。

「なっ……か、辛い！」

藍が渡してくれる茶を何杯も喉に流し込む。

全く予期していなかった衝撃に、丁子はきよろきよと辺りを見回した。

「な、何ですかこれ！」

ほぼ反射で放り出した饅頭からは、赤黒い餡が覗いている。

藍は残った茶をすべて茶杯にあげ、あり得ないほど辛い饅頭の正体を告げた。

「唐辛子だ」

「はぁ！？」

「唐辛子。真朱が食べたいって言うから、浩伊こういに作らせた」

なぜこんな無謀な食べ物を注文するに至ったのか。

そしてなぜ製作の段階で拒否しなかったのか。丁子はひげ面の料理人を恨む。

「近頃は巷で辛いものが流行ってるらしいから、どんなものかと思

ったんだけど」

火照った顔を仰ぐ丁子を見て、真朱は本に顔を埋めて笑った。

「……その様子じゃ、食べない方がよさそうだね」

「ひどいです！分かっていて食べさせたんですね！」

「食べさせたのは私じゃないし、勧めたのは藍でしょ」

「責任転嫁です！」

「事実でしょ。私は一度も丁子に『食べる』とは言っていない」

真朱は本を閉じて寝椅子に横たわる。

菓子を諦めてまで得た割りに、あっさりとした手放し具合だ。

確かに思い返してみれば、直接的に彼女から菓子をもらった訳ではなく、むしろ丁子が本と引き換えに取り上げた形だ。

「……………ん？」

自業自得かと落ち込みかけた思考に待ったをかけたのは、藍の何かを含んだ表情だ。

「藍さん、知ってたんですよ？」

「ああ。先に食べたなら夕飯の味が分からなくなるだろうと思って、食後に勧めた」

「……。あの、分かっているなぜ私には食べさせたのでしょうか」
そりゃあ、と藍が唐辛子入りの饅頭を摘まみ上げてニヤリとする。

「面白いから」

知ったかぶりは恥をかく

「『結局のところ丁子は』何？」

卓の上から茶器を片付ける藍に、寝椅子から真朱が声をかける。

仕事で用人に呼ばれて部屋を出るまで、椅子の上でいじけていた丁子の姿を思い出し、彼は言葉を繋ぐ。

「『真朱の手のひらで転がされてるだけ』だろ」

「イヤだな、私が性悪みたい」

「性悪だよ」

侍従と言う役に就きながら、主従よりも友人に近い関係である藍と真朱の間には遠慮がない。

彼は真朱に歩み寄り、寝椅子に投げ出された本をつついた。

「『世界珍獣辞典』ねえ？ そんなに読みたかったとは、初耳だ」

「読めてて黙ってたくせに」

「それが真朱の望みだっただろ」

真朱はいたずらが成功し、上機嫌で眼前に垂れる藍の髪をいじった。焦げ茶色の髪は邪魔にならない程度に結ってあるが、それでも背中を隠すほどの長さがある。自分とは違う癖のない藍の髪がお気に入りのは主は、暇になるとそれをいじり回す。

そのくせ、自分の髪を結うのは好きではないという偏屈だ。

「私のいたずらだって言ってよかったのに」

「真朱が望んでも、行動したのは俺だ。だったら、その責任が俺にあるのは当然だろ」

「丁子には嫌われるね」

「いい葉さ。俺を疑ったところまではよかったんだけどな」

夕食前の間食を丁子が止めること、時間があれば同じ部屋で茶をすることを見越した上で、唐辛子饅頭を食べさせると言う回りくどい計画を立てたのは真朱だ。

一度、丁子に勝たせてから嵌めるあたりが特に性悪だと思うのだが。

真朱をしつけるには、丁子ではまだまだ力不足である。



そろそろ夕食の支度が整うかという時刻。

居間に顔を出したのは給仕の用人ではなく、困惑顔の丁子だった。忙しい足音が響き、おとないが告げられる。

「あの、真朱さま。お客さまなのですが…」
「客？」

「二頭立ての馬車でいらして……。その、宰相閣下だそうなんです」
「宰相？」

真朱の眉間にシワが寄る。

隣で適当に編まれた髪をほどいていた藍も、手を止めて丁子を見た。
「屋敷に上げたの？」

「あ、いえ。白磁どのが門のところで留め置いています」
優秀な家令の白磁（はくじ）は、相手が誰であれ主の許しなく客に敷居を跨がせはしない。

しかし相手の肩書きが本当であれば、いつまでも待たせておく訳にはいないため、丁子が伝言に走ったのだ。

ところが、主の答えは予想外のものだった。

「お帰りいただいて」
「は？」

「こんな時間に、先触れも寄越さず押しかける礼儀知らずには会いたくない」

「いや、でも宰相ですよ？女王陛下の次に偉い人ではないですか。そんな人がおいでになるって一体…」

「偉いったって、王弟に逆らえない若造なんだろう」

「それは、噂ではそうですね」

実際はどんな人物か丁子には分からないが、とにかく一国の宰相がわざわざ訪れるのだから、ただ事ではないはずだ。

それなのに当の真朱は取り付く島もない。

「何の用事か知らないけど、とにかく会わない。こちらの都合を無視して押しかけて、宰相って言うだけで面会が通ると思っているのが気に入らないね」

「でも、断ったりして大丈夫なんですか？」

「なにも丁子に追い返せて言っているわけじゃない。白磁に伝えれば丁重にお帰りいただくよ」

「……じゃあ、何と伝えるんですか？」

「人を訪ねるなら礼儀を勉強しなさい」

青くなった丁子は、それでもよろよると回廊を戻って行った。高飛車な伝言に、高齢の白磁が卒倒しなければいいが。



結果として、突然の訪問者は馬車ごと引き上げていった。

もちろん、人生経験豊富な家令が主人の不敬な発言をそのまま伝えることはなく、日を改めることを丁寧な言葉と態度で勧めていた。

「ちらっとお姿を拝見しましたが、宰相閣下って本当に若い方なんです」

夕餉と湯浴みを済ませた真朱の後ろに立ち、髪を厚めの布で挟んで水分をとる片手間に、丁子は先刻垣間見た貴人の話を振った。

女性の習慣として伸ばしている真朱の髪は、乾くとゆるくうねる柔らかい手触りだ。

茶や赤が混じることが多い倭の国で、なかなかお目にかかれない漆

黒の髪を、痛まないよう手入れするのも丁子の仕事の一つである。

「二十歳を少し過ぎたくらいに見えましたけど、それだけ若かったらいくら大公家が名門でも、王弟殿下には敵わないかも知れませんね」

「名前だけのお坊ちゃんには無理だろうね」

「大公家って、他には宰相になる方はいらっしゃらないんですか？」

「あそこは男系だからまず女性は除外するとして、本家に跡を継げる男子は二人だけかな。現宰相の父親は故人だし、祖父にあたる前宰相も二年前に亡くなってる。大公の家は現宰相とその弟がいるだけだね」

病気や事故で若くして亡くなる人がいるのはけして珍しいことではないが、その状況では下手をすると一族が途絶える可能性もある。宰相は大公の家が代々世襲してきた役職であるから、跡を継ぐ者がいなくなった場合はどうなるのだろうか。

それを問うてみれば、真朱は軽く肩を竦めた。

「王弟が喝采を上げて喜ぶよ。いくら若いと言っても、議会の伝統上、王弟も大公を無視できないから、女王の代理なんて地位に甘んじているだけ。大公の歴史は？」

「塾で少しだけ。大公家は創始から宰相を務めてきた一族で、議員の中でも一番発言力が強いって」

「大公がいなくなれば、その後はさっさと女王を退位させて自分が王に、って言うのが目に見えるね」

「王室も、王弟殿下以外に陛下の跡を継ぐ方は？」

「陛下は三人兄弟で、兄王が亡くなって跡を継いでいる状態だね。末子が王弟。陛下には娘がいたけど、十年くらい前に亡くなってる」
布から持ち替えた櫛をあごに当てて、丁子は頭の中で家系図を描いてみる。

「兄王に、お子様はおられなかったのですか？」

「王子が二人いたけど、上はずっと身体が弱くて、陛下の娘より前に亡くなってるね。下は上の王子が存命中に臣籍に下っていて、継

承権を放棄してるから除外される」

残るは王弟のみ、という訳だ。

ちなみにその後はといえば、王弟には宰相と同じ年頃の息子がいるため、先々の継承も可能である。

「何て言うか……王族も大公の一族も不幸続きなんですネ」

「どうかな。世の流れが、そういうものが不要だと言っているのかも知れないよ。不必要なものは、時間の中で淘汰されていくものだし」

「淘汰、ですか……。あ、でも」

しんみりとした空気になってしまったのを振り払おうと、丁子は塾で耳に挟んだことを口にする。

「女王陛下には孫娘がいるって噂、知っていますか？」

「亡くなった娘に子供がいたって？」

「今の真朱さまのお話からすると、そうなりますね」

「誰との？」

「それは、子供たちの噂なのでそこまでは分かりませんが」

「噂では宰相は王弟の言いなりで、別の噂では秘密の王女がいる、と。なかなか楽しいね」

まったく楽しくなさそうな真朱の声音に、話題を間違えたかと丁子は焦る。そもそもどこからこの話の流れになったのかを考えて、もともと聞きたかったことを思い出した。

「あ、あの。宰相閣下がいらした理由に心当たりはないんですか？」
当初の反応からは、宰相の来訪を嫌がりはしても驚きはなかったように思う。

「ないけど、面倒事の臭いがする。塩でも撒いておこうかな」

「食べ物で粗末にしてはいけません。知っていますか？最近、税金が上がって商品の値段も上げざるを得ないとかで、物の売買がうまくいっていないんだそうですよ」

仕入れたばかりの情報を披露すれば、真朱は丁子を振り返った。

「へえ。どこで聞いたの？」

「大通りの八百屋の女将さんと、乾物屋のご主人です」

「そう。それで、丁子はどうして税金が上がると物の値段が上がるか知っている？」

「う……」

痛いところを突かれて丁子が黙ると、真朱は筆と紙を持ってくるよう彼女に言いつけた。

〇〇に真珠？

丁子が卓の書物を片付ける間、その端で真朱がのんびりと墨をする。玉で作られた硯と文鎮、筆置きは、売ればそれだけでひと財産築けるほどの価値があると言う。初めてそれを聞いた時、仰天した丁子は危うく硯を落として割るところだった。

以来、丁子がそれらを扱う時は細心の注意を払うことにしている一方で、持ち主の真朱は全く気にせずごりごりと墨を擦り付けている。

「真朱さま、紙はこちらでよろしいですか？」

「いいよ」

卓上のろうそくに火を灯し、手習い用の薄い紙を卓に置く。向かいに座るよう促されて丁子は藤の椅子を持って来た。

「前提として、八百屋や乾物屋は、商品を王都の外から仕入れてる。特に乾物屋は外国だね」

「はい」

真朱は筆を取り、左端に簡単な荷馬車を描き、その右側に三本縦線を引く。そして右端に円を描いた。

「縦線が関所で、円が王都だと思って。……商品は地方から関所を通って王都に入る」

左から縦線を貫いて、矢印が円に刺さる。

「そして関所を通過することに、商品には税金がかけられる」

縦線を一本越えるごとに、税に見立てた荷が馬車に積み上がっていた。

「では、通過する関所が多いほど、税金は余計にかかるんですね」

「そう。だから、近くで採れる野菜より、外国から運んでくる魚の方に、高い税金がかけられてるはずだね」

「だから、乾物屋のご主人が怒っていたんですか」

「関所で散々税金上乘せされた上、王都に入る時点でまた税金。商

人としてはやっていられないでしょう」

筆の柄で円の上を叩く真朱を、丁子はポカンと見上げた。

「何？」

「王都に入る時にも、税金がかかるんですか？」

「王都の財政は、何が支えてると思ってるの？それから、税金が上がったと言うけど、王都の税率はここ何年も変わっていないはずだよ」

「それなら、関所の税率が上がったと…？」

「関所から上がってくる税金も何年か大きな変動はないね。税が上がるほど目立った変化も、国内で起きていない」

「では、ええと…」

何本かの線と円の間を、丁子の目が往復する。

王都はともかく、税金が増えていないなら、関所の税率は変わっていないと考えるのが普通だ。

しかし、商人は税金が上がったと言う。

「上がった分のお金が、どこかに消えていると言うことですよね」

「そうだね。まあ、関所を管理する貴族か、王都の役人か、統括する王族か。もしくはすべての共謀か」

卓に頬杖をつく真朱を、信じられない思いで見つめた。

「…：本気で仰ってます？」

「それ以外、思い当たる節がないね」

「でも、税率の変更は議会で決定するものですよね。それでは、議会で不正がまかり通っていることになります」

「今の議会が正常に機能しているなら、この国はもう少し暮らしやすいだろうね」

「何を暢気なことを仰ってるんですか！」

丁子は思わず腰を上げる。

「私たちの国ですよ。好き勝手されて腹は立たないんですか？何とかしなきゃいけないじゃないですか」

「何とかって、具体的には？」

「それは……陛下に上奏するとか」

「女王は長いこと表舞台に出ていない。上奏どころか一般人では謁見もできないよ」

「取り次いでもらうとか」

「丁子、自分が言ったことも忘れたの？」

「……あ」

議会で不正が容認されていると言ったのは丁子である。その議員が、己の利益を脅かす上奏を許すはずがない。

冷静に指摘され、勢いをなくした丁子は椅子に戻った。

真朱は筆を置き、話を畳みにかかる。

「議員ならまだしも、王弟に目をつけられたら、悪くすれば消されるからね。余計なことはいらないに限るんだよ」

だから宰相のおとないも迷惑だ、と言外に告げている。

「分かったら今日はこれまで」

反論が出なくなったところで、卓のろうそくを消された。

「もう遅いから寝るよ。お休み」

「…はい。ありがとうございます。お休みなさいませ」

真朱が寝房に入るのを見届けて、丁子は硯と筆を洗いに立つ。

分かりやすく図解された紙を丁寧に折り畳み、懐に入れた。

塾で学ぶこともあるが、こうして真朱から教えられることも、また多いのだ。

卓を片付けて、部屋の明かりを落とせば侍女の仕事は終わる。

明日も早朝から仕事が始まっている。今夜の話題は自分なりに考え直し、次の機会に真朱と再び意見を交わすことにして、丁子は自分

に与えられた部屋へと足を向けた。

発言は手を挙げてから

朝議が執り行われる議場は、王宮の一角にある。

本来ならば女王の臨席を賜り、厳粛に進むべき朝議の場は、しかしどこか気だるい空気に包まれていた。

「かねてより問題となっていた、国境の城壁の修繕費ですが――」

滔々と報告書を読み上げる大臣の話など、誰が聞いているのか。

大抵の議員は居眠りか、近くの席同士で雑談に耽っているか、ひたすら沈黙を貫くかだ。

国民が見れば激怒しそうな議会も、参加できるのは子爵以上の爵位を持つ貴族とその子弟、そして軍の上層部に限られていた。

その権利を持つ議員も、近頃では軍の上層部を筆頭に欠席が珍しくない。

「現在の財政状況を鑑みた結果、関税と商人の所得税を上げた中より捻出したいと……」

議場を見渡せる玉座はもう長く主を迎えておらず、今は布の覆いがかけられていた。

さすがにそこへ座らない分別はあるのか、王弟は議長席で腕を組み瞑目している。何を考えているのか定かではないが、その泰然とした存在感は誰も無視できない。

「――私からは以上です」

書類を下ろし、ぼそぼそと告げた財務大臣が席に座る。

「意見がなければ、決を採りたいと存じます」

弱々しい言葉は、王弟に席を追われた元議長だ。

女王が政治を執っていた頃は、取り次ぎと議事の取りまとめを任されてきた老侯爵であるが、今の体制になってからは朝議の進行のみが仕事となっている。

「では、国境の修繕費を関税と所得税より捻出することに――」

「相模（さがみ）侯爵」

張りのある声が響き、侯爵は言葉を止めて顔を上げた。

仰ぎ見たのは、玉座のある壇上。

玉座のすぐ脇。覆いのされたそれより、よほど豪華に見える椅子から立ち上がるのは、この場で二番目に若い男だった。

「あー、宰相閣下。何か」

「発言の許可をいただけますか」

まっすぐに自分を見つめる若者から視線を逸らし、侯爵は王弟の様子を窺う。

彼が相変わらず目を閉じたまま微動だにしないのを確認して、そつと頷く顔には哀れみが浮かんでいた。

「関税も所得税も、引き上げれば商人ばかりか国民の生活を圧迫することになります。また現在、周辺国との関係は良好であり、国境の修繕が急務とは思えません。時間をかけ、国庫に余裕ができてから着手すべきです」

正論の手本のような発言に、まず交通大臣が口を開く。反論はたいていが、この交通大臣から始まる。

「平和な今だからこそ、城壁を築いておくのですよ、閣下」

「それとも、いざ戦争が始まってから、城壁を直すまで侵攻を待つ

てくれとでも頼むおつもりですか？」

横から外務大臣が挟んだ言葉に、あちこちから笑いがこぼれた。

「開戦を前提にしておいでようですが、そもそも戦争を回避するのが貴殿の仕事でしょう、陸奥（むつ）外務大臣」

「こちらがどれほど手を尽くそうと、相手が聞き入れなければどうしようもない。その場合のことを申し上げているのです」

「起こる可能性の低い事柄より、まず国民の生活に目を向けるべきです」

父親や祖父ほど歳の離れた大臣や貴族を相手にしながら、なお退かない宰相に周囲の反応は冷たい。

彼が朝議の場で、青臭い正論を述べるのが習慣になっているからだ。

「戦争が起きれば、その国民の生活が脅かされるのですぞ」

「しかしこれ以上、税を上乗せするのは…」

「解せませんな」

低い声音が議場を打った。

ぴしりと空気が引き締まる。

議長席の王弟が、腕組みを解き薄い笑みを浮かべていた。

「既に相当の税が、かけられているような口ぶりですな」

「……一部の商人から、税が上がったと言う話を聞いています」

「ほう、それは初耳だ。閣下は民ともよく交流をお持ちのようで、感服致します」

議長席を見下ろす位置にいる宰相を、態度で王弟が威圧するののもいつものこと。

「しかしあまり民に近付きすぎるのはいかがかと。流言に惑わされ、貴族としての正しい目を曇らせることになりかねません」

おおらかに構えているようで鋭い眼光を向けてくる王弟を、大蛇のようだと宰相は感じていた。

そしてじりじりと締め上げられているのに、年若く力のない自分に

は抜け出す術がない。

「とは言え、商人の報告も捨ててはおけぬ。税については、こちらで調べさせましょう。増税の件は次の議会まで持ち越しと言うことで、よろしいですか？」

「……。結構です」

両手を握りしめ、いくつもの反駁を飲み込んで了承すると、王弟は朝議の閉会を告げた。



「毎度毎度、よく飽きもせず正論ばかり叩けるものだ」

石造りの回廊を歩きながら、王弟が言う。

彼の後ろを歩くのは、宰相より一つ年下で、朝議に参加する議員の中では最も若い男。

王弟の息子である和泉蘇芳（いずみ すおう）だ。

「民に寄った物言いも、先代によく似ている。腐ってもあやつの孫か」

宰相の祖父。先代宰相と王弟が、数年前まで王宮での権力を二分していたのは有名な話だ。

朝議でも思想の違いから意見が対立することがほとんどで、先代が亡くなった当時など、王弟による暗殺疑惑がまことしやかに囁かれた。

「父上は、なぜ宰相を放逐なさらないのですか。面倒な口など塞いでしまえばよろしいでしょう」

さして興味もなさそうに、蘇芳は尋ねる。

大人のやりとりをさめた視点で眺めている彼には、何度丸め込まれようと懲りずに理想を主張する宰相の姿は、いつそ哀れに思えた。祖父が亡くなり、彼を気に入る重宝していた女王が表舞台から消えた今、宰相には後ろ楯がない。

ただ宰相への任命式が、女王が自身で行った最後の公式行事だったことだけが、今の彼の地位をなんとか保たせているのだ。

だが、そんなものは父が本気になれば簡単に潰せてしまうことを、蘇芳は知っている。

「必死な様が可愛いではないか」

「……それだけですか？」

王弟は横目で息子を見ると、また口角を上げた。

「下手に若造を潰して、女王の息のかかった軍部に動かれると厄介だからな。沈黙している者たちこそ、警戒が必要だ」

「軍部ですか。言われてみれば近頃、元帥らは朝議に不参加でしたね」

「だが逆に、若造が宰相として無能を晒し続ければ、そういう者たちも動けぬ。担ぐ御輿が馬鹿ではたまらぬからな」

人違いにご用心

正面の出入り口を守る衛兵に敬礼で見送られ、宰相は議場を後にした。

形式だけとはいえ、今の宰相に態度で敬意を示すのは彼らくらいである。

他の議員など、道を譲ることすらなくなった。

重くなる足取りで執務室へ戻ると、扉の前で従者が待っていた。

「何かあったか？常磐（ときわ）」

いつもであれば、議場を出たところで控えている彼がいなかったことに、今さらながらに気付く。

「お疲れのところ、恐れ入ります。大公様」

常磐が丁寧な礼を取る。生まれた時から自分に仕えている彼の礼が、形だけでないのは疑うまでもないことだ。

「侯爵が、お時間をいただきたいと」

一瞬、気弱な元議長の顔を思い浮かべたが、すぐ別の人物に思い当たる。

「どこだ」

「いつもの亭（あずまや）にて、お待ちかと」

「行ってくる。お前は留守居を」

「かしこまりました」



王宮内で、人目につかない場所はほとんどない。

いつでも誰かの視線に晒され、どんな些細な会話すら誰が聞き耳を立てているか分からないのが現状だ。

宰相が足早に目指すのは、数少ない『人目につかない場所』である。

議場や大臣たちの執務室がある区画を抜け、王族が住まう宮に近付くと、自然と迷路に迷い込む。

かつての庭師が完成させ、現在でも複雑さを増している巨大な樹木の迷路は、正式な道案内がなければ到底抜けられず、侵入してきた者たちが情けなくも大声で助けを呼んだと言う話も残っている。

教えられた通りの道順を辿り十五分ほど歩くと、少し開けた場所に出た。

そこにある小さな亭で男が二人、宰相の到着を待っていた。

「やあ、月白（つきしろ）。早かったね」

柔和な笑みで宰相の月白を迎えたのは、壮年の男だった。

名は駿河浅葱（するが あさぎ）。生まれは女王の甥に当たる王子であったが、彼女の娘が亡くなる数年前に臣籍に下り、現在は侯爵となっている。

王弟の甥でもある彼は、既に王位の継承権を放棄しており、朝議での影響力などないに等しい。事実、月白が宰相になってから、彼が朝議で発言するのを見たことがなかった。

しかし浅葱は、交通大臣や外務大臣たちとは違い、月白を嘲ることもなく、それどころかこうして個人的に親交を図ってくる。

年の頃も父親と息子のそれに近く、けして表立って味方はしてもらえなくとも、月白は浅葱を慕っていた。

「先程はお疲れさま」

「それは嫌味ですか」

月白は眉間にシワを寄せる。

「王弟に任せたら結局、関税が上がったことも握り潰されて、更に増税を押し切られるに決まっています」

「それは、昨日今日の話ではないだろう」

「しかし、国民の疲弊を無視して、平和な世だというのに余計な費用を増やすことばかり」

「本当に平和なら、必要ないだろうけれどね。――青磁（せいじ）、月白にお茶を」

浅葱が促すと、すかさず傍に控えていた初老の男が月白に茶を出す。
「ああ、それよりも！」

彼を見た月白が、ハツとしたように浅葱を仰いだ。

「夢見亭に青磁がいたのは、一体どう言うことですか？」

「彼は青磁ではないよ」

「じゃあ、これと同じ顔をした赤の他人ですか？」

給仕をする青磁を指差せば、浅葱がその手をやんわりと下ろさせる。

「夢見亭にいるのは白磁だ」

「白、磁…？」

「弟が、家令としてお仕え致しております」

「…兄弟なら話くらい通しておいてくれ。訪ねたら門前で追い返された」

昨夜のきっぱりと面会を拒否した家令を思い出し、月白は不満げに茶をすすった。

浅葱が小さく笑う。

「夢見亭の主人の話をしたのは浅葱でしょう。一度会ってみるといいって」

「まさか、その日の内に会いに行くなんて思わなかったさ。おかげで私から君のことを伝える暇もなかった」

「それにしても宰相を追い返すなんて、夢見亭の主人って、どんな女なんです？」

「会ってみれば分かるよ」

「だから、追い返されたと」

浅葱は茶杯を卓に置くと、少し意地悪そうな顔をした。

「先触れは出したかい？」

「……出していない、です」

「それは、追い返されても仕方がないね。礼を逸したのは君だ」

「……はい」

「ことを急いではいけないよ。大事なところそ慎重に」

はぁ、とため息が溢れる。

俯く月白の肩を、苦笑で浅葱が叩いた。

「午後から夢見亭に行くけれど」

「私も一緒に……！」

「そう言うと思って、君を伴うことも伝えてあるよ」

「あ、ありがとうございます」

馬子にも衣装

「真朱さま、お手紙です」

漆塗りの文箱を手に居間に入ると、真朱は藍と卓を挟んで盤上の遊戯をしていた。

縦横に区切られた盤の上で王や馬などの駒を取り合う、チャトランガという遊びは藍が持ち込んだものらしいが、駒の動きや決まりが複雑で、丁子はまだ覚えきれていない。

屋敷の中でも、それで遊べるのは彼ら二人だけだ。

「その辺りに置いておいて」

劣勢なのか、難しい顔で盤上を睨む真朱が言う。

「ですが、急ぎのようです」

文箱にかけられた組み紐は、至急の用件であることを示す赤色だ。

「誰から？」

「差出人の名前はございませんが、白磁どのは『駿河さまから』と仰いました」

基本的に、屋敷の表向きのことは家令の白磁が取り仕切っているため、丁子は文を届けに来た人物を見ていない。

見ていたとしても、それがどこの誰に仕えているのかが分からない丁子では、あまり意味はないのだが。

「駿河：と言うことは」

「厄介ごとだな」

片手で額を覆う真朱に頷いて、藍は駒を片付け始めた。

「丁子、手紙」

「はい」

手渡した文箱を膝に乗せると、特殊な結い方をしてある組み紐を難なく解く。

受け取る相手と差出人だけが知る手順で紐を結うのは、途中で文を読まれないための工夫だ。仮に無理やりほどこいても、元の結び目に直せなければすぐに気付かれる。

民間にはあまり普及していないが、一部の貴族では組み紐を結う専門の用人を雇うこともあるほどだ。

「真朱、片付けたから卓を使い」

「ん、ありがとう」

紐と箱を卓に置くと、真朱は文を広げた。

装飾はなくとも上質だと分かる紙に書かれた丁寧な筆跡を、さほど時間をかけずに目を通す。

「丁子、それを持って来てくれ」

手持ち無沙汰になった丁子に藍が示したのは、折り畳んだチャトランガの盤。

彼は駒の入った箱を抱えているので、彼女はすぐに従った。

いくつかある玩具は、目を離すとすぐに真朱が散らかす。片付けが面倒でないよう、それらは隣の書房にまとめることにしていた。

「厄介ごとなんですか？」

「そうだろうねえ。滅多にここへは来ない人だから」

四畳ほどの広さにある書棚には、ところ狭しと書物が詰め込まれている。それでもまだ居間に積み上がっているのだから、真朱の読書量は半端でない。

その書棚のひとつ、玩具を集めた籠に盤と駒を納めて、書房の扉を閉めた。

「真朱、侯爵は何だった？」

居間の卓に伏せた真朱に藍が尋ねると、彼女は指先でつまみ上げた文をひらひら振って見せる。

「午後から来るって」

「へえ」

「宰相も一緒に」

「……へえ」

「あー、面倒。藍、白磁に知らせて。それから、浩伊に昼食を早めにと頼んできて」

「分かった」

取り上げた文を畳んで文箱に戻し、藍は踵を返した。

「丁子。宰相はどうでもいいから、侯爵を迎えられるくらいの衣裳を選んで。着替えるから」

「え？」

「なに？」

「いえ。真朱さまの衣裳に関する認識が、思いの外、常識的でしたので」

普段着を緩めた格好で客を迎えると言い出さないか、ドキドキしていただに真朱の指示に反応が遅れてしまった。

丁子が正直に口にする、彼女は心外だとばかり起き上がる。

「残念ながら常識的な認識も持ち合わせてるんだよ。ほら、早く」
「はい！」



寝房で着付けを手伝う傍ら、丁子が疑問を向ける。

「真朱さま、午後にいらっしゃるのはどなたです？」

「駿河侯爵。臣籍に下った女王の甥だよ」

最初に小袖の紐を留めて、朱色の大袖を着せる。正装ではないが、公式の場に出られるくらいの服装を丁子は選んだ。

「昨日仰っていた方ですね。なぜ夢見亭に？」

「夢見亭を所有しているのは駿河侯爵だからね。侯爵自身が来るのは、別におかしなことじゃない」

「ここの主人は、真朱さまではないんですか？」

「私はここを与えられて住んでるだけ。藍と丁子以外は侯爵が雇ってる」

用人は屋敷に付随するもので、侍従は個人に仕えるものであるから、雇用先が違ふことはままあることだ。

「私、てっきり用人たちも真朱さまが雇っているんだとばかり」

口を動かしながら白い袴の上に裳をつけ、帯を締めた。床に膝をついて裾を整えてから、丁子は真朱を見上げる。

「えっと……真朱さまは、駿河侯爵の、その」

「囲われの愛人かって？」

「いえ、あの…」

慌てて両手を振る丁子に、主は長い袖を翻して笑った。

「愛人だったら、もっと頻繁に来ると思うね。丁子はここへ来てから、屋敷で侯爵を見たことは？」

「……ございません」

屋敷どころか、どこでも目にする機会はない。

「そう言うことだよ」

「失礼なことを申しました。申し訳ございません」

主人に対して随分と不敬な想像をしたものだ。

恥じ入って頭を下げる丁子を、真朱は鏡台の前から呼んだ。

「髪、結って」

「はい」

わだかまりを感じさせない声に、仕え始めてから何度も救われている。

第一印象は大切です

午後一番で、月白と浅葱は夢見亭へ赴いた。

門で出迎えたのは、やはり青磁と瓜二つの顔を持つ家令で、彼は浅葱を見ると恭しく頭を下げる。

「お帰りなさいませ、旦那さま」

「久しぶりだね。変わりはしないか？」

「はい。おかげさまをもちまして」

相好を崩した老人は、次に月白へ向き直る。

「昨夜は大変失礼をいたしました。本日は心ばかりで恐縮ですが、おもてなしを言い付かっております」

「いや、私こそ先触れもなしに失礼した。心遣い、感謝する」

自分に非があることを理解すれば、相手が誰であれ謝罪するのに抵抗は無い。貴族としては貴重な性質を持ち得るのは月白の美点であった。

「上がるるか」

「お嬢さまは客間でお待ちですので、ご案内いたします」

「白磁どの、刀は佩いていても構わないか」

王宮では武官でも許可が無い限り武器の持ち込みは禁止されているが、今は外を歩いて来たため、月白は太刀を一振り提げている。

他人の屋敷に上がる場合は、その主の意向に沿うことが礼儀とされていた。

「ええ、構いません。むしろ、お待ちいただいた方がよろしいかと」
「？」

怪訝な顔で浅葱を見ると、彼は曖昧な笑みを浮かべて先を促した。

猛獣でも待っているのかといぶかしみながら、月白は先導する白磁と浅葱に続く。

夢見亭と呼ばれる屋敷は、倭王朝の伝統を踏襲した造りになっていた。門から家屋までは石畳の床に屋根のついた回廊が続き、平屋の棟が左右対称に並ぶ。回廊の周りには紅葉やツツジが植えられ、庭から引かれた小川も流れていた。そして突き当たりを折れたところで、月白は思わず足を止めた。

「……あれは、桜ですか？」

前庭のほぼ中央に、どっしりとした老樹が根を張っているのに目を奪われる。葉も落ちかけているとはいえ、その風格に圧倒された。

「そう。見事だろう？」

「あれほどの木は、他ではなかなか見られません」

「桜の別名は夢見草という。この屋敷の名前の由来だね」

回廊の手すりに寄って、浅葱は目を細めた。

「ここがまだ離宮だった頃、幼少の兄上はよくここで静養されていて、あの桜をご覧になっていたそうだ。私が臣籍に下る時、素晴らしいものがあるからと私に下さった」

「この離宮は、払い下げられたと聞きましたが？」

「私の立場を考えて下さったんだよ。臣下になる身で、過分に目をかけられたとやっかみを買わないために」

「……屋敷の所有が浅葱だったから、『旦那さま』なのですね」

「今は、管理だけしかしていないのだけれど」

月白が知るのは王宮近くにある屋敷だけで、他に浅葱が家を持っているとは初耳だった。

出仕するには距離がありすぎて不便な屋敷を、それでも手放さないのは兄から譲られたものだったからだろうか。

感傷的になっていると、控えめに白磁が声をかけてきた。

「旦那さま、そろそろ」

「ああ。あまり待たせてはこちらの身が危ないね」

だからどんな猛獣だ。



「お嬢さま、白磁でございます。旦那さまがお出でになりました」
「どうぞ」

客間の戸口で声をかけると、すぐに応えがある。

想像していたより若い声に驚きながら、月白は浅葱の後について部屋に入った。

明るい室内は隅々まで人の手がよく行き届いており清潔で、調度は派手ではないが使い込んだ落ち着きを持ち、飾り立てたものよりよほど上品に思えた。

待っていたのは三人。一人は壁際で茶のしたくをする地味な少女。

一人は上座の後ろに控える、珍しい服装の優男。そして最後の一人、上座に納まるのはこれもまた若い女だった。

艶やかな黒髪を上半分だけ結び上げてべっこうの簪を挿し、朱と白で揃えた衣裳をまとして座す姿は、良家の子女として十分な落ち着きを醸している。しかし、その顔にはまだあどけなさ残り、二十歳は超えていないように見えた。

「この子供がここの主人ですか？」

「礼儀も弁えぬ青二才に、子供扱いはされたくないね」

浅葱を振り返った月白は、淡い唇から放たれた言葉にぎよっとする。過去にこんな奔放な口を利く女と出会った経験がなく、しばし呆然と彼女を眺めた。

「随分とごゆっくりの到着だね。いつからここの回廊は王宮のような迷路になったのかな」

「すまなかつたね、庭の桜について見入ってしまった」

浅葱は慣れた様子で椅子を引き、腰を下ろすと壁際の少女に顔を向ける。

「彼女は初めて見る顔だけれど」

「ちょっと前に屋敷の前で拾ったの。行き倒れていたから。私の侍女にした」

「それは気の毒に」

「運がいい方だよ。この屋敷の前で行き倒れて」

「そうではなく、君の侍女になったことだ」

「それは私に対する挑戦？」

「正直な感想を述べたまでだよ」

軽い調子で進む会話に、優男が吹き出した。口元を押さえて顔を逸らす、堪えきれない笑いが漏れている。

その声で我に返った月白は、決まり悪そうに用意された椅子に腰を下ろした。

「では、紹介しようか。真朱、彼は王宮で宰相の位に就いている、大公の伊勢月白閣下だ」

「知っている。先触れもなしに、夜遅く目立つ馬車で乗り付けた挙句、面会を断られてすくすく退散したヘタレ宰相」

「へ、へたれ？」

今度こそ、月白は卒倒しかける。

仮にも王の右腕として政治を仕切る宰相に向かって、言うに事欠いてヘタレとは。だが言われたことは事実だけに、名誉回復の術もない。

そして政治を仕切るのは自分でなく、王弟だと言う現実には、月白は椅子の上でそっと落ち込んだ。

そんな彼をよそに、女主人はそちらの紹介を始める。

「その侍女は丁子」

浅葱と月白に茶杯を出した少女が、ぺこりと頭を下げる。くりくりとした目はしっかり客人を捉えており、利発そうだ。

「こっちは侍従の神鳥藍」

涼しげな目元が印象的な優男は、外国の装いだった。襟のついた白い衣に黒の上着を着て、腰の帯に小太刀ほどの剣を吊っていた。その服装は、剣さえなければ西国の宗教者に見える。そして儀礼用ではない剣が、彼が護衛の役目も負っていることを示していた。

「それから私は、倭（やまと）真朱」

『やまと……？』

疑問の声は、月白と丁子の両方から上がった。

国内で、家名を名乗れるのは貴族に限られている。貴族社会では、

よほど親しい間柄でなければ名前を呼ぶのは不敬とされ、公の場では家名に敬称をつけて呼び合うのが慣わしだ。そして上流階級の中でも、国名を家名として使用できるのは更に限られた一族、王族だけであった。

浅葱が一つ瞬きをして、静かに告げる。

「彼女――真朱は、私の娘だ」

侍女の手から、真朱の茶杯が滑り落ちた。

昔話を少々

丁子を取り落とした茶杯は、床に叩きつけられる寸前で藍の手によって救出された。

陶器の割れる音に代わって響いたのは、椅子が倒れるそれだった。立ち上がった月白は、しかし宙に視線を投げたまま放心している。

「も、申し訳ございません！藍さん、怪我は…」

「大丈夫、大丈夫。それより気を付けろよ」

幸い茶を注ぐ前だったので、火傷もしていない。

茶杯を受け取り、丁子は深く頭を垂れた。

「はい……。その、驚いてしまつて。真朱さまが、侯爵さまのご息女だったなんて」

「そうだ、侯爵の娘…」

丁子の呟いた言葉に、月白が反応する。

「元は王族でも、浅葱は臣籍に下って姓も与えられている。なのにその娘が倭を名乗っているのはなぜですか」

通常であれば、真朱が名乗るべきは駿河の家名だ。

侯爵の娘が倭を名乗れるとすれば、父親である浅葱が臣籍に下る前に真朱が生まれ、王に彼女は王族であると宣下を受けているか、もしくは——母親が現在も王族であるか、だ。

真朱と浅葱の年齢と、当時の状況。そして先の条件を総合して思考し、弾き出した答えに驚愕した月白は、腰が抜けたように座り込んだ。

「まさかそんな……朱華（はねず）殿下との？」

「はねず、殿下？」

「女王陛下の娘だよ。十年くらい前に亡くなってる」

藍が注釈をつけてやると、主人の出自を知らなかったらしい丁子はばかりと口を開けた。

「では……真朱さまは、女王陛下のお孫さまなのですか？」

「それだけではない。浅葱のご尊父は女王陛下の兄、先の王だから――」

真朱は先王の孫にもあたる、間違いなく直系の王女だ。

「何と言うことだ……」

頭を抱えた月白に、真朱は不敵に笑った。

「頭の中身までヘタレてはいないようだね」

「ふざけている場合か！浅葱、なぜ黙っていたんです？こんなことが王弟に知れたら……」

「だからこそ、黙っていた」

そっと吐き出すように、浅葱は言った。

「――少し、昔の話をしようか」



「二十年ほど前。私が十六の頃まで、この国は父上の下で、安定した政治体制だった」

卓に両手を重ね、浅葱は語り始める。

兄は幼少期から病弱だったが、王太子としての才は十分あり、自分が兄の支えになって国を継いでいくのだという理想を、浅葱は早くから描いていた。

しかし、ある程度成長してくると、浅葱を王太子にと推す勢力が現

れる。

まだ若いながらも議会で勢いをつけ始めた、王弟であった。

王弟は叔父と言う立場を利用して近付いて来ては、言葉巧みに王になることの利を囁いたが、子供ながらに兄を尊敬していた浅葱には、彼の言葉に何の魅力も感じられなかった。

おかげで、自分の存在が兄の立場を脅かすものだと思理解した浅葱の行動は早かった。

王族の名を捨て、臣籍に下ることを父王に申し出たのである。

「父上を始め誰もが反対した。兄上にさえ、頼むから馬鹿なことは止めてくれと懇願されたほどね」

当時、臣籍に下るのは臣下の元へ嫁いだか、罪を犯した者への罰かのどちらかであり、まだ十代の王子がそれを申し出るなど前代未聞のことだった。

誰もが浅葱に翻意を迫る中、ただ一人理解を示したのは従妹の朱華だ。

彼女とは同世代であり、幼い頃から兄も含め三人で遊んだし、悪さをしては乳母から叱られた。

きちんと整理された衣装部屋ですべての衣を裏返しにしたり、厨房に忍び込んで塩と砂糖の入れ物を取り替えたり。議場前の大階段に油を塗って、議員たちが滑るのを見て笑ったり。いたずらを思い付くのは朱華で、叱られるのはもっぱら浅葱だったが。

「今思えば、我が妻ながら随分と型破りな人だったよ。君は母親似

だね、真朱」

目を細める浅葱は本当に嬉しそうだ。

「会ったことのない人に似てるって言われてもね」

「いや、その憎まれ口もそっくりだ」

破天荒な性格の従妹は、その時もやはりぶっ飛んでいたのだ。

『でかしたわ、浅葱。臣籍になるなら、貴方は公式に私の下僕よ』

心から喜んだ朱華を前に、本気で止めようかと思ったのは秘密だ。

「うわ、真朱さまそのものです」

「間違いない」

頷き合う従者二人に真朱が顔をしかめる。

「私はそこまで傲慢ではない」

「無邪気なだけ、と朱華は言っていたね」

「……」

最終的に、弟の台頭を感じていた父王が息子の意思を酌んだ形で、浅葱は侯爵の地位を得た。

駿河の姓を与えられ王宮を出た浅葱に、王弟は興味をなくしたようで、その後二年ほどで顔を会わせても声をかけてくることはなかった。

だが、これで王位継承に波風が立たないと安心した浅葱は甘かった。王弟は役に立たない浅葱から、次の標的に乗り換えただけだったのだ。

兄が父王の後を継げなかった場合、王位が転がり込んでくる可能性がある従妹に。

浅葱を懐柔しようとした時とは違い、朱華に対して王弟は威圧的だった。

自我の成立してきた王子や王女の後ろについて実権を握るより、自ら王位を手に入れる方へ、欲の天秤が傾いたらしい。

言いなりにならなければ、いっそ邪魔者として消すこともいとわなほど、王弟は短期間で力をつけていたのだ。

朱華は他人に迎合するような質ではなく、当然叔父の思惑も突っぱねていたが、身の危険を感じるようになった彼女に、浅葱は離宮へ逃れるよう訴えたこともある。

それでも朱華は王宮を離れようとしなかった。

己が去れば、王弟は今度こそ兄に手をかける。そうならば父王亡き後、気の弱い己の母を押さえ込んで王位につくだろう、と。

しかし浅葱も、指をくわえて見ている訳にはいかなかった。

幼い頃から積み上げてきた朱華との関係が、その頃には恋人に変わっていたからである。

「何度頼んでも、彼女は私と共には来なかった」

「危険が迫っていたのに、なぜです？」

「臣下となった私の代わりに、父上や兄上を側で支えるのだと。逆に私は、議会で早く出世しろと焚き付けられた」

結果として、出世を待つ時間はなかった。

浅葱が臣籍に下って三年後、兄が流行り病であっけなく亡くなったからだ。

それまでの数年は、風邪を引くことも少なくなってきたため、兄に期待をかけていた父王の嘆き様は相当なものだった。その憔悴と心労が祟ったのか、翌年にまた猛威をふるった病で、父王もまたこの世を去った。

敵情視察

昼の会食を終えると、王弟は仕事の残る執務室へ向かった。

王弟に会食を申し込んでくる貴族は数多く、一つに応じればまた別の貴族から声がかかる。

相手が変われば、会話が変わるかと言うとそうでもない。皆一様に王弟の政策を称え、賛同し、終いには自分の地位の向上を遠回しに訴えるのだ。

王弟が議会で権力を握るため、手っ取り早く足掛かりとしたのがそういう矮小な者たちだ。自らの利益と保身のために、権力のある者に追従する彼らは、いかにも扱いやすい。

餌をチラつかせればすぐに寄ってきて、上手く手綱を握れば思う通りに働いてくれるのだ。

ただし、そういう者らこそ、自分に利益がないと思えば簡単に寝返ることも、王弟は心得ている。

だからこそ、無駄な時間と分かっているながら貴族たちとの会食に應じるのだ。

甘い蜜を吸おうと群がってくる貴族たちには、今しばらく餌が必要になる。

回廊を渡る王弟に気付いた従僕が、恭しく執務室の扉を開けた。

室内は広く、昼間でも格子窓から差し込む光だけではすべてを照らすことができない。窓とは反対の壁際は、いつも影ができていた。

その影に、ひっそりと膝をつく者がいる。

王弟は肘置きをついた椅子に腰かけ、その者に発言の許可を与えた。

「宰相と駿河侯爵が、共に王都の外れの離宮へ入りました」

「浅葱か……若造を取り込んで何を企んでいるのやら」

「他の者が集まる様子はありません」

影から現れたのは、王弟が動かしている密偵だ。

あちこちに放っている中でも、柏木（かしわぎ）というこの男には浅葱を観察させている。

何の未練もなく王族の籍を捨てた甥を、王弟は観察し続けてきた。王弟の取り巻きたちは、臣下となり朝議での力を持たない浅葱を、とるに足らぬと嘲るが、彼はその動向から目を離したことはない。

今、王弟が姉から王の地位を奪えば、足枷のなくなった浅葱は迷いなく王弟に刃を向けるだろう。

いくら籍を捨てていようが、浅葱が直系の血を引いているのは事実。より先王に近い血筋だとして、軍部を味方につける公算も高いだけに、王弟にとっては面倒な相手だ。

逆に言えば、女王をこちらが抑えている限り浅葱は動けない訳だが。何せ実の叔母である上に、愛した女の母親だ。

「無下にはできまいよ」

うつそりと笑った王弟は、しかしすぐに口元を引き締める。

浅葱が年若い宰相と懇意なのはもちろん承知していた。

あえて放置しているのだが、その浅葱が月白を自宅に招くことは初めてである。

「ようやく老いぼれが死んだと思えば、次は孫。よくよく兄上の血筋は大公家がお気に入りに見える」

王弟は苦々しく吐き出して、机を指で叩いた。
密偵らしく気配を消して、柏木は心内だけで同意する。

先王が病に倒れた後。次の王に誰を据えるかで貴族社会は大きく揺れた。

選択肢は三つ。すぐ下の妹君か、末の弟君。そして臣籍にある元王子。

実質的には、気弱な王女を除いて王弟と浅葱の一騎討ちかと思われたが、そこで声を上げたのが前宰相だった。

先王が王太子の頃から、全幅の信頼を寄せられていた前宰相は、貴族たちを前に理を説いた。

『駿河侯爵は既に我らと同じく王の臣下であり、継承権も自ら放棄している。よって、王族としての復権は認められない』

では、と色めき立つ周囲に、老境をとうに過ぎた老宰相は、
『また、兄弟の間において、王位は年齢の序列にのみよって継承されるべきものである』

として、王弟の姉である王女を次期女王として推したのだ。

筋の通った言葉に、反論できる者はいなかった。

じゃじゃ馬な娘とは正反対に、大人しくて気の弱い姉が前宰相の申し出を受諾したのも、王弟にとっては予想外のことである。

姉の後ろ楯に納まった前宰相はその後、朝議の場でことごとく王弟と対立した。

「宰相は、熱心な民主主義者でしたね」

「ああ。自ら貴族の頂点にいながら片腹痛い」

王弟と前宰相が対立したのは、主にその思想の違いが理由だ。

伝統に則った専制君主制を支持する王弟と違い、前宰相は国民を主体とした、民主主義への移行を主張したのだ。

民主主義が実現すれば、議会は国民のものとなり貴族は特権を失う。そのため、半数近くの貴族から反発を受けて実現はしていないが、前宰相が世を去った今も一部貴族の間では賛成の声も根強くあった。現在、王弟に反発するのはほぼ前宰相が唱えた民主主義に傾倒する派閥である。

「あの二人が組んで、派閥を率いるつもりでしょうか？」

「今のままのあやつらに、求心力はない」

従僕の問いを一蹴し、王弟は白くなりつつある顎ひげを撫でる。

「貴族や軍部を納得させられる大義がなければ、状況は動かぬ」

「仮に、大義を掲げた場合は……？」

「……私は、望むものは自らの手で得ることに決めたのだ。二年前にな」

邪魔はさせぬ、と目に力を湛え王弟は柏木に退出を命じた。

会話は正確に

「当時の背景は、よく分かりました」

月白が組んでいた腕をほどいて真朱に視線を向ける。

彼女は浅葱が語る間、一切の口を挟まず淡々と茶を飲んでいるだけだった。

「彼女が生まれた経緯について、教えていただけますか」

彼が一番知りたいのはそこだろう。

仮にも宰相という地位に就いている彼だ。

過去から現在に至る国内の情勢も貴族間の権力図も、ある程度は把握している。

しかし一度として、亡き王女が浅葱との間に子供をもうけていた、などという情報が耳に入ったことはないはずだ。

丁子が茶壺を手新しい茶を注ぐのを待って、浅葱は月白の問いに答えた。

「真朱が生まれたのは、兄上が亡くなった翌年。十八年前だ」

「それは、先王が崩御された年でもある訳ですね」

「そう。父上が亡くなる半月ほど前だ」

「確かに微妙な時期ですが、公表されない理由にはなりません。なぜ誕生を秘匿されたのですか」

「その時には、私が生まれた理由を失っていたからだよ」

真朱からもたらされた答えは、浅葱に苦笑を浮かべさせた。

この子は自分の存在を、ためらいなく否定してしまえる。

そんな風に育つ環境に娘を置いてきたことは、浅葱が背負っていない業だ。

「真朱は、兄上の養子になるはずだった。朱華も始めから納得ずみで——と言うか、やはりこれも朱華の発案だったんだが」

それも元を辿れば、父王の意志に沿おうとしたものだ。



兄に期待をかける一方で、父王は早くから次の跡継ぎを望んでいた。やはりどこかに、兄の将来を案じる気持ちもあったのだろう。

浅葱が臣籍に下るのを機に、結婚を促すことも増えた。しかし妃を迎えることに、兄自身は常に消極的で、じりじり答えを引き伸ばしていた。

それならばと、爆弾を投下したのが例によって朱華である。

その時は叔母も同席する食事の席で、父王は兄にそれとなく貴族の娘を薦めていたらしい。

兄が毎回、同じようにそれを退けるのを見ていた朱華は、実にあっさりと言ったそうだ。

『だったら、私と浅葱の子供を養子にすればいいじゃない』

浅葱はその日の内に『今すぐ登城せよ』との厳命が下って、自宅となった夢見亭から王宮へ駆けつけることになった。そして兄に絞め殺されんばかりの勢いで襟首を捕まれ、父王の元へ連れて行かれたのだ。

国王一家の居間で浅葱を待っていた父王は、憤激とも悲壮ともつか

ぬ表情で円座に座っていた。

『父上、一体何ごとですか』

『それは余の台詞だ！朱華との関係は認めていたが、実の親に報告もないとはどういうつもりか！』

『浅葱、こればかりは私も父上と同感だ。朱華どのにとっては一大事だろう？』

『松葉（まつば）はあまりのことに寝込んでいる！余は情けなくて松葉に会わせる顔がないわ！』

父王と兄が揃って慌てふためく中、朱華の名前が出たことで逆に浅葱は落ち着いた。

有無を言わせぬ様子の使者が夢見亭に来た時は、それこそ国家の一大事かと肝を潰したのだ。

詳しい事情は分からないが、騒ぎの中心が朱華ならば浅葱にも対処のしようがある。

しかし、自分の母親を寝込ませるほどの何をしでかしたのか。

『ですから、今度は朱華が何を？』

『しでかしたのはお前であろう！子供ができたなどとは聞いておらんぞ！』

『それは私も初耳です』

『だったらなぜ余に一言……初耳？初耳と申したか？』

冷静な浅葱の言葉に、父王が困惑顔で首を傾げた。

『なぜ知らぬ。父親はそなたであろう？』

『私は確かに朱華を愛していますが、まだ夫婦になった覚えはございません』

『……。その、つまり子供ができることは』

『あり得ません。そもそも、なぜそのような話に？』

浅葱の怪訝な様子に、父王と兄は顔を見合わせる。

互いに混乱する空気に、騒ぎを招いた張本人の声が割り込んだ。

『失礼致します。浅葱が来ていると聞きました。』

部屋に現れた朱華は、普段と何ら変わらぬ風情である。『朱華！そなた、子ができたのではないのか？』

『まあ陛下ったら、早く孫の顔がご覧になりたいのは分かりますけれど、残念ながら私はまだ乙女ですわ』

『朱華、年頃の女性が口にするものではないよ』

そっとたしなめる浅葱を見つけると、朱華はさっさとその隣に腰を下ろした。

『君は一体、父上と兄上に何を申し上げたんだ？叔母上まで、寝込んでおられるそうじゃないか』

『母上には今話をして来たわ。変な誤解で寝込むんだもの、困ったものよね』

現状、この場の人間を困らせているのは朱華であるが、父王と兄は辛抱強く彼女たちの会話が終わるのを待っている。

破天荒な王女を扱えるのは、浅葱くらいなものだと学習しているからだ。

『どこぞの殿下が結婚しないって駄々をこねるから、解決策を提示したまでよ』

『具体的に、その解決策を教えてもらえるかな』

『陛下は跡継ぎが欲しいだけなのでしょう？それなら、私が浅葱の子を生んで、その子を養子にすればいいって言ったのよ』

『断じてそうは言っておらん！』

我慢できずに父王が突っ込んだ。

兄を見れば、疲れたように肩を落としている。二十六にもなって、駄々っ子と言われたことも地味に堪えているらしい。

察するところ、朱華はほとんどの説明を飛ばしたようだ。どうせ『私の子供を養子にすればいい』とか何とか言ったのだろう。

それなら父王や兄が勘違いし、神経の細い叔母が寝込むのも無理はない。

『朱華、次からは結論に至るまでの過程も説明しなさい。周りが混乱する』

『そうみたいね。気を付けるわ』

切々と訴える父王に、朱華は頷いた。

王室一家を混乱に陥れた朱華の思い付きは、しかし実現可能な案として、ごく内輪だけで再考されることになる。

特に兄が強い賛同を示した。普段は穏和で父を立てる兄が、この時は渋る父王を押し切ったのだ。



「お分かり？ 浅葱の兄上とやらが死んだ時点で、私は用済み。公表する時期を逸して王宮では育てられないから、夢見亭に置いておかれていると言う訳」

「真朱、適当に端折るのはどうかと思うが」

「もう飽きた。つまらない昔語りばかり」

真朱は卓に頬杖をつき、じろりと月白を見やる。

「大体、その宰相閣下は何なの？ 他人の家に上がり込んで根掘り葉掘り」

浅葱の話を租借していた月白は、突然の批判に言葉を詰まらせる。

「あ、いや…私は浅葱が勧めるから」

浅葱は『会ってみろ』としか言っておらず、月白の方には真朱と会った後、どうにかしようとするほどの用件はないのだ。

「それなら、浅葱は何をしに来たの？まさか、今さら何かさせようって言うんじゃないよね」

「残念ながら、そのまさかだ。月白にも付き合ってもらおうつもりで連れて来た」

ご近所付き合いは難しい

「あろう」

実に気まずそうに、丁子が手を挙げた。

一同の視線を集めた彼女は、恐縮しながら言う。

「今さらなのですが、私は出ていた方が……」

一介の侍女である自分が、国家の秘話など聞いていては障りがあるだろう。これまでもえらく重大なことを聞いてしまったが、この先は更に重そうな予感がする。

答えたのは浅葱だった。

「構わないよ。真朱が許しているのであれば、問題ない」

「真朱さま……」

「貴方がいなければ、誰が客にお茶を出すの」

私はそんな面倒なことは嫌だよ。と、やや変則的な許可の言葉に、丁子は安心して部屋の隅に下がった。

真朱の後ろでは、藍が相変わらず直立不動で控えている。

彼は今までの主人たちの会話を、常に微笑みを浮かべて聞き流していた。

さて、と浅葱は仕切り直す。

彼にはここからが本題だ。

どう伝えても、真朱の機嫌を損ねることは間違いないのだから、正面から行くしかないだろう。

「この先、高齢の陛下では、形式上の王であることも難しくなる」
「そうだろうね」

興味無さそうに、真朱は皿に盛られた砂糖菓子をつまんだ。

ぱりぱりと音を立てる色とりどりの菓子は、緊張感など皆無である。

「もう何年も叔父上を抑えてはおけない」

「ふうん」

「叔父上は近く、隣国と戦争をするつもりだ」

「……」

「それは本当ですか!？」

菓子をつまむ真朱の手が止まり、隣で月白がたじろぐ。

その驚きように、宰相である月白にはもう少し勉強をさせなければと浅葱は感じた。

単純で正論好きの若造。そう判断されていれば、とりあえず命の危険はないと思ったが、いかんせん彼は経験が少なすぎるのである。

「叔父上は次の朝議で、増税を決定するつもりだ。それはそのまま軍事費に充てられるだろう」

「城壁の修繕ではないのですか？」

「月白、一口で城壁と言っても場所は様々だ。どの部分をどの規模で修繕するのか、知っているかい？」

月白は朝議で配られた書類を思い返すが、修繕の範囲について、具体的なのは記されていなかったように思う。

「宰相閣下、貴方は自分の目で城壁を見て回ったことがあって？」

「それは……」

一度もない、とは情けなくて口に出せなかった。

王宮の執務室で雑事に追われる日々に、国境まで出かけて行く時間などない。と言うのは言い訳にしかないのだろう。

「お話にならないね。そんなだから王弟に舐められるんだよ」
鼻で笑い、真朱は浅葱に顔を向けた。

「今うちが戦争するとしたら、東のヒースだね。王弟は海洋貿易で
もしたくなったの？」

「そのようだね」

倭は世界で最も大きな大陸の中心に位置し、東西南北にそれぞれ四つの国と接している。

西は歴史と宗教の国であり、中立を謳って大陸のどの国とも一定の交流を持つ、聖ノルスシュヴァイツ皇国。観光地としても有名で、単にノルスと略されることが多い。

北は膨大な地下資源を誇るレノン連邦で、過去その資源を狙った侵略に晒された経験から、屈強な軍隊を作り上げて軍事大国となっている。

南は吐晏（とあん）王国。東西に細長い国土の半分近くが砂で覆われ、どの国からもあまり干渉を受けずに、独自の文化を守る謎の多い国だ。

そして王弟が戦争を仕掛けようとしているのが、東のヒースガルド共和国連合。港を有し海運業に強い国と平野を利用し農業に強い国とが、いくつか集まって連合し、安定した発展を遂げている。

倭は周囲の国から資源を輸入し、加工したものを輸出する方法で成長して来た技術国なので、今から他国を侵略したところで、大した成果は見込めない。

「王弟としては、ヒースを属国としたいのだろう。レノンから輸入する燃料は値切りがきかないからね」

「だからヒースを脅して、そっちの輸入額を抑えようって？」

馬鹿馬鹿しい、と真朱が頭を振る。

「今はまだ、叔母上の勅命がなければ軍を動かせないから、叔父上も準備段階までしか進めない。けれど万一、叔母上が倒れれば」

「開戦一直線？」

「それを許す訳にはいかない。だが、私には叔父上を止められる力はないんだ」

無言で肯定した浅葱は、束の間沈黙してから真朱に頭を下げた。

「恥を忍んで頼む。真朱、君に次期女王として、王宮に戻ってほしい」

剣と誓い

深く頭を下げる父親を前にしても、真朱は昨夜のように淡白だった。

「拒否する」

「この国の先のことだ。考えてくれないか？」

深刻な話題にようやく背を伸ばす月白とは反対に、真朱は体ごとそっぽを向いて断固拒否の構えだ。

「嫌。絶対に嫌」

「そう言わずに」

「いーやーだ」

「話だけでも」

「嫌」

「真朱」

「……………」

終いには顔を逸らして返事もしない真朱に、我慢できなかったのは月白だ。

「いい加減にしろ！」

両手で卓を叩いて立ち上がる。茶器が音を立てるが、そんなことは気にならなかった。

今、この国を正す力が自分にあると言うのに、それを使おうとしない彼女に腹が立つ。

完全に言い負かされていることは棚上げだ。

「さつきから聞いてりゃ、嫌嫌ばかり言いやがって！この国はお前の国だろう！？王弟に好き放題させていいのか！」

「……………」

荒い言葉で怒鳴ったのにおののいたのか、真朱は大きく目を見開いて月白を見る。

もしかしたら泣くかと一瞬怯んだが、残念ながら彼女はそんな可愛いげのあるタマではなかった。見る間に真朱の目が据わる。

「冗談じゃないね！」

こちら椅子を蹴倒して立ち上がった真朱は、袴の裾を跳ね上げ片足で卓を踏みつけた。細かな刺繍の施された革靴と、たおやかな脚が月白の眼前に晒される。

「真朱さま！」

何てはしたない！と侍女が目を剥くが、彼女は更に両手で月白の襟を掴む。

そのまま引き寄せられ、月白は反射的に己の刀を目で探した。

椅子に座る時に外した刀は、卓に立て掛けてある。

白磁の忠告は、まさかこれを見越してのことではないだろうな、と思いつながらその目を真朱へ戻した時――喉元に鈍く光る剣が突き出されていた。

「……何のつもりだ」

「女とのケンカに、そんな無粋なもんは駄目でしょ、大公の旦那」
風変わりな優男は、穏やかな表情で物騒な剣を握っている。

「私は手にしてもいないが？」

不覚にも乱れた動悸を宥めつつ、月白はすぐ脇に立つ藍を見た。
それまで全く気配を感じさせなかった彼が、今は確かな殺気をまとって存在している。

「目で刀の位置を測っていた」

「確認するのも駄目か」

「俺的にはイエスだ」

「……優秀な護衛だな」

襟を掴まれたまま月白が肩を竦めると、ようやく藍は剣を引いた。そして真朱の額をぺちりと叩く。

「あう……」

「お前も。武器を持つてる相手に、素手で戦いを挑むんじゃないよ。俺が余計な気を回すはめになる」

「だって……」

「いいからその手を離して座れ。話が進まない」

不承不承、真朱が椅子に腰を戻すと、藍は何事もなかったようにその後ろへ立つ。

その際、月白に笑って見せた藍は、“腕はいいが食えない男”と言う印象を彼に植え付けた。

藍に叱られて席についた真朱は、タンタンタンと指先で卓を打つ。

「私の国？馬鹿を言っちゃいけない。うちの侍女の方が余程わきまえてるよ」

主の苛立ちが及ばぬうちに、卓の茶器を回収しようかどうか決めかねていた丁子が、突然遡上に上げられて固まる。

「うちの侍女は、王弟に牛耳られている現状を『私たちの国なのに』と憤った。その通り、この国は国民のものだよ」

「……それは理想論だ」

「理想論だと、その口が言うの？」

真朱は容赦なく、月白の指摘を叩く。

事実、朝議では正論や理想論ばかりと嘲られている彼には、堪らない言葉だ。

それでも、月白には真朱の態度があまりに無責任に思えた。

「王女としての責任はどうなる」

「そっちの都合で王宮から遠ざけておいて、今さら王女だから責任を果たせなんて、筋が通らないんじゃない？むしろ貴方こそ、宰相としての責任を放棄してきたんでしょ」
いちいち耳に痛いことを言ってくれる。

「宰相の権限で議員を解任することもできるのに、貴方は宰相になつてから、誰一人として王弟側の議員を辞めさせていない」

「王弟側に対して強く出れば確実に潰される。そうなれば、議会で歯止めがなくなるんだ」

「結局そうして日和ったんだね。潰されるほどの改革はしない。でも睨まれない程度には正論を吐く。いい心がけだこと」

「真朱、言い過ぎだ」

浅葱が間に入ると、真朱は不快を隠さない顔を逸らす。

始めに交わしていた会話では、特段不仲には見えなかった。何がそこまで彼女を頑なにさせるのか。

「結局貴方たちは、他人には王弟と戦えと面倒を押し付けるんだね」
「違う！」

その恨み節は、月白は迷わず否定した。

「何が違うの？」

「浅葱は貴方を、一人で戦わせようとはしていない。私もだ」

浅葱がこの企みに月白を巻き込んだ意味。それは大公家の名前で釣れるであろう味方を、娘の勢力として取り込むためだ。

月白自身が必要ではないのは、彼女とのやり取りで十分理解した。

それでも彼は真朱と言う存在に、確かな力を感じている。

関わりたくない態度で示してはいるが、真朱の見識の高さは世間を疎んでいる者にはあり得ない。常に世の中の動きを観察し、世界情勢まで注視している証拠だ。

深窓の令嬢とはとても言えたものではないが、この気の強さなら旗

印となっても折れはしないだろう。

「私も浅葱も、本気でこの国を変えたい」

卓に両手をつき、真摯に述べる。

無力と侮られようが、月白は大家の嫡男としてそれなりの教育を受けてきた。大局的なものの考えも、できない訳ではないのである。

「今さら貴方を引っ張り出すこと、本当に勝手だと思う。申し訳ないとも。だが、戦争で国民に被害が出るなら、私は次期女王に貴方を推す」

「：政治的判断と言うこと？」

意外にも、真朱が月白に視線をくれた。

「国は民のものだと貴方は言った。だとしたら、私は民のために、無理矢理にでも貴方を王弟にぶつける」

その代わり、と月白は言葉を続けた。

「貴方はどれだけ私を責めても構わない。乞うた以上、私はさいごまで、貴方に対する責任を負い続けると誓う」

「さいご？」

「私の一生の、最期まで」

月白は顔を上げる。

相当必死な顔をしていたかもしれない。同情めいた表情で、丁子が真朱を見た。

彼女は腹の上で両手の指を組み、眼を閉じて修験者のように動かない。

「それはつまり――」

やがて臉を震わせた真朱が、ぽつりと溢す。

固唾を呑んで言葉を待つ月白に、彼女ははっきりと微笑んだ。

「貴方が一生、私の下僕になると言う宣言だね」

「断じて違う！！」

思わず叫んだ月白の隣で、浅葱が額に手を当てて肩を落とす。

「君は本当に……」

「見事なほど父親の遺伝を無視したよな」

途切れた言葉を、藍が正確に引き継いだ。

隣は何を知る人ぞ

丁子が客間から茶器を下げて来ると、厨房では浩伊が鍋を覗いていた。

来客を迎えるため、厨房から茶壺などを持ち出したのが昼過ぎで、今はもう格子窓から西日が射し込む刻限である。

桶に水を張り、丁子は丁寧に茶杯を洗う。

「茶は足りたか？」

「はい。ほとんど真朱さまが飲んでいましたけど」

浅葱と月白にはそれぞれ二度ほど注いだだが、真朱は軽くその倍は飲んでいた。

「そりゃあ、機嫌が悪い証拠だな」

「そうなんですか？」

「ああ。嬢さまが浴びるように茶を飲んでたら要注意だ」

浩伊は茶目っ気のつもりか、片目を瞬かせる。

彼の体躯とひげ面では、熊が顔をしかめたようにしか見えなかった。その熊——もとい浩伊は、杓子で鍋をかき混ぜつつ、こんなことを言った。

「宰相閣下との話は決裂か？」

「いえ、それがそうでもないらしくて……」

丁子にとっては緊張続киだった会談は、月白の下僕宣言が効いたのか、数日後にまた彼らを招くことを真朱が承知して終了となった。

「でも見ているこっちが疲れました。真朱さまは始めから機嫌が悪いし、藍さんは宰相さまに剣を向けるし」

「藍さまは、嬢さま命だからなあ」

「それにしても、やりすぎです。侯爵さまもお止め下さないし、

本当に私の寿命が縮みましたよ」

「侯爵さまは負い目感じておられるから、嬢さまに強く出られないんだろうよ」

ふと手を止め、丁子は浩伊を見る。

まるで真朱の出自を知っているような口ぶりだ。

「…真朱さまと侯爵さまのこと、ご存知なんですか？」

「親子だっという話なら、知っている。ここの用人は皆、旦那さまに所縁のある者たちだからな」

皆、と彼は言うが、夢見亭で働く用人は片手で数えられるほどしかない。

目の前の浩伊と、家令の白磁。そして白磁の妻だ。

「知らなかったのは私だけですか…」

真朱に直接拾われたため、どうやら丁子は前提がないまま雇われたらしい。

「しかし、あまり驚いていないようだな」

杓子で鍋のふちを叩き、浩伊が見下ろしてくる。

「そんなことはないですよ」

茶杯を桶から上げて、丁子は答えた。

火を止めて洗い場に來た浩伊が、丁子の手から茶杯を取る。

「お前は、嘘がつけないな」

目を合わせたら余計な感情まで読み取られる気がして、彼女は無言で桶を見つめた。

その頭を、大きな手がぐしゃぐしゃと撫でた。

「責めてる訳じゃない」

「……分かっています」

浩伊は居丈高に説教などする男ではないし、丁子から何かを感じ取っていても、その確信を他の人に言ったりしない。

ただし、事実を知らぬ振りも、またしないのだ。

「その時が来たら、真朱さまには自分で言います」

そうしろ、と再び頭に置かれた手は優しかった。

調教は子犬のうちから

昨日の騒動がなかったかのように、いつも通り朝の仕事を終えた丁子は、ある伯爵の邸宅を訪れていた。

夢見亭より遥かに立派な門構えは、積み上げた石垣が屋敷の辿って来た歴史を誇るかのように、見る者を威圧する。

しかし一步邸内に足を踏み入れれば、丁子を迎えるのは家令でも侍従でもなく、子供たちの歓声だった。

「丁子お姉ちゃん！」

「姉ちゃん、おはよー」

まだまだあどけない子供たちが、丁子を見つけて飛び寄って来る。

丁子は挨拶を返ししながら、一人ひとり頭を撫でてやった。

どの子も我が家のようににはしゃぎ回っているが、その中に誰一人として、伯爵家の子供はいない。

彼らは皆、下級貴族や庶民の子供であり、ここは伯爵が長を務める私塾であった。

この私塾は文字の読み書き、算術などを教えることを目的としていて、対象は家庭教師を雇う余裕のない下級貴族や、庶民の子となっている。集まるのは大抵、十歳前後までの子供だ。

丁子がここへ通い始めたのは、侍女として雇われた後。真朱に紹介され、週の半分は講師に教えを乞うようにとの言いつけだった。もちろん、年少の子供たちに混じって教科を学ぶ訳ではないが。

教室として解放されている離れに入ると、こちらにも子供が溢れていた。

講師役の大人の姿も見えるが、まだ授業が始まる時間ではないので好きにさせているようだ。

板張りの回廊を、数人の男の子が駆けて来る。

服や帯の形などが異なり、親の身分に差があることが見てとれるが、子供たちは一様に楽しい表情だ。

「姉ちゃん、おはよー」

「きゃあっ」

追い抜きざま、先頭を走って来た子供に尻を叩かれ、丁子が悲鳴を上げる。

「昌騎（しょうき）！」

「なんだよー。ねーちゃん、胸揉まれた方がよかったかー？」

「どちらも止めなさい！」

昌騎は商家の息子で、ここではガキ大将である。

「揉むほど無いくせにー」

「やかましいわ！」

注意したところで、遊びたいばかりの子供が聞くはずもない。笑い声を響かせながらバタバタと遠ざかって行った。

「く、屈辱……」

ため息をついて見ていると、子供たちが行く先に男が現れた。

彼は驚いたように瞬いた後、走って来た昌騎の首根っこを掴み上げる。

ぎゃ、と昌騎が猫のような声を上げ、他の子供たちも雷に打たれたかのように立ち止まった。

「おはようございます、昌騎。今日も元気ですね」

「お、おはよう、ございます。先生」

「おはようございます！」

「ます！」

子供たちも口々に挨拶をするが、男はにっこりと笑む。

それを見て、途端に子供たちが竦み上がった。

「廊下は走ってはいけなと、何度も言いましたよね」

「ごめんなさい！もうしません！」

「それも何度も聞きましたね。お仕置きは何がいいですか？」

『ひいっ』

子供は危険に敏感らしい。

摘まみ上げられたまま震える昌騎が哀れになってきて、丁子は彼らに近付いた。

「おはようございます、先生」

「おはようございます、丁子」

今度は普通の笑顔で応えて、男は昌騎を下ろす。

「昌騎、敬（けい）、クラウス。全員、自分の名前を百回書いて提出しなさい。授業が終わってからで結構です」

子供たちは声を揃えて返事をする、ぎくしゃくと去って行った。一人だけ、頭に布を巻いた男の子が遅れを取り、転がるように前方の二人を追いかけた。

それを見送って、男が丁子に向き直る。

「子供はいつでも元気ですね」

「はい。……あの、さっきの子は？布を巻いた子」

「ああ、クラウスですか？」

「クラウス……」

見送った子供たちの中に、丁子が初めて見る顔があったのだ。

回廊を歩き出した男は、丁子にも先を促した。

「クラウス・アベルと言う名前で、ヒースガルドの商人の子です。仕事でしばらく倭に滞在するとのこと。その間、交流をさせてくれと、ご両親に連れて来られたんですよ」

「ヒースガルド、ですか」

「とてもいい子ですよ」

昌騎につられなければ、と続けて、男はたどり着いた部屋の扉に鍵

を差し込んだ。

子供たちに先生と呼ばれ、恐れられながらも慕われているのは、私塾の長である信濃（しなの）だ。

伯爵と言う高位が王弟の鼻についたのか、信濃は任官当初から教育大臣に任ぜられている。

現在の倭では、教育とは貴族の子弟が家庭教師から受けるものである、との考え方が一般的なため、特に仕事のない教育大臣は閑職と名高い。

それでも思うところがあつたのか、彼は子供向けの私塾を立ち上げた。

貴族が私的に弟子を持つことが、特に珍しくないことを知った上で
の逃げ道である。

その信濃が、真朱に紹介された丁子の師であつた。

「先日お貸しした本は、お喜びいただけましたか？」

「はい。……とても」

おかげで酷い目に遭つた、とは信濃には非がないので黙っておく。
招き入れられたのは、離れの隣に建つ棟の書房だ。

夢見亭よりのそれより広く作られた室内には、国内外を問わず様々な書物が収められており、真朱に貸し出されたのもこの所蔵物である。

信濃が向かったのは、畳が二畳敷かれた一角だ。

ゆったりとした袖と袴の裾を払い、彼が円座に腰を下ろすのを待つてから、丁子も畳に正座した。

「さて、今日は何をお話ししましょうか」

学者は総じて変人

信濃は代々、高位の文官を輩出する家に生まれ、幼い頃から学問に志してきた。

『ちちうえ、ぼくは大きくなったら、先生か学者になります』

などと将来の夢を語る一人息子を、両親ともに微笑ましく見守っていたものだ。

遅くにできた子供であった信濃を、特に父親は可愛がっていた。彼が学問に関して非常に優秀だったことも、父親の気をよくしたのだろう。

このまま行けば、信濃も自分のように議会で高位に就けるだろうと安心していた父親は、息子が語った夢など綺麗に忘れ去っていた。であるから、息子が成人を控え、そろそろ王宮での仕官先を探してやらねば、と考えていた矢先、

『父上、私は教師か学者になると申し上げたではありませんか。仕官なんてごめんですよ、面倒くさい』

と、本当に信濃が学者になろうとした時には、父親は危うく憤死するところであったと言う。

伯爵家の跡取りが、王宮へ仕官しないなど前代未聞である。

泡を食った父親に、あの手この手で拝み倒され、遂には母親に泣き落としまでされ、ようやく信濃は爵位を継いで大臣の職を得た。

議会では王弟が権力を掌握した頃で、中枢はすでに王弟を支持する派閥が多数を占めていた。けれど、政変に興味のなかった信濃は、教育大臣に任命された時、内心で喝采をあげたのを覚えている。

信濃の仕事と言えば、貴族の子女が遊学する際の、他国との調整と、逆に外国からの留学生の受け入れに関するくらい。閑職と言われるのも領けたが、信濃はいっこうに構わなかった。

何故なら、有り余る無駄な時間を、全て自分の趣味（学問）に充て

ることができたからである。

更に嬉しいことに、教育大臣として与えられた僅かばかりの権限で、社会実験と称して私塾を持つことができた。

伯爵と言う地位にありながら、信濃は教師と学者と言う夢を叶えてしまったのだ。



障子を開け放った円窓から、庭園の木々を揺らした風が入ってくる。自分の代になってから離れと共に増築した書房は、信濃の城だ。

若い頃から集めに集めた、古今東西さまざまな書物を収めていて、許されるなら——いや、許されなくても年中こもっていたい場所である。

当初、私塾の子供や講師たちには解放していなかったが、いつの頃からか特別な生徒に限って、書房を講義に利用するようになった。

「先生にお尋ねしたいことがあります」

「はい、どうぞ」

“三人目”である丁子への講義は、年少の子供たちとは違い、一対一の問答のような形で行っている。

内容はその日によってまちまちだ。信濃が用意した議題について講義した後、意見や質問を交わすのがだいたいが、時には世間話で終わることもあるし、講義の時間中二人で好きな本を読んでいるこ

ともある。

しかし今日は、向き合うとすぐに丁子の方から本日の議題がもたらされた。

「今の政治について、いかが思われますか」

「そうですね……」

言葉を切り、信濃はしばし丁子を見つめた。

信濃から見るに、彼女はけして愚かではない。紹介された時はやや世間知らずだったが、教えを受けることにはとても素直なのだ。

信濃は“一人目”でもある元生徒の真朱に頼まれた通り、丁子には国の成り立ちや、現在の議会組織の役割などについて教えてきた。

丁子はいつでも真剣に話を聞いたし、疑問があればその場で尋ねる癖もついている。

だが、今まで政治の在り方について、意見を求められたことはなかった。

そう言ったものに、踏み込ませる何かがあったのだろうか。

「歪んでいる、と思います」

率直に、信濃は答えた。

「それは、王弟殿下のせいですか？」

「かの方も関係がないとは言えません。しかし問題は……そうですね、議会に蔓延する空気でしょう」

「空気？」

「ええ」

信濃は顎を引いて肯定を示した。行儀よく両手を膝の上で重ね、背筋を伸ばす丁子は、顔だけを天井に向けて首を捻る。

彼女なりに“空気”の概念を捉えようとしているらしいが、何ともおかしいな反応は苦笑を誘った。

「今、王宮に関わる貴族の多くは保身に必死です。少しでも高い地位、また役職に着こうとね。何故だか分かりますか？」

「陛下がおられなくて、監視がないからでしょうか」

「私腹を肥やすだけであれば、監視がないのは好都合ですね。ですが、より高い地位を求める動機としては、どうでしょう。正当でない方法を使ってまで何故、己の安定を？」

「……分かりません。普通はそんなことをしなくとも、自分の仕事をしっかりとやっていれば、おのずと評価されて相応しい地位やお役職につくの」

萎れたわりに、丁子の言葉は答えに近い。

あと一步、生徒が解答に辿り着けるよう、信濃は思考を促した。

「貴族の仕事を評価するのは、誰ですか？」

「それは、宰相や陛下では？……あ」

首を捻った丁子が、にわかに目を輝かせた。悩んだ末に、答えを見つけた子供そのものだ。

「女王陛下からも宰相からも、正当な評価がなされないから、目に見える地位を求めるんですね」

「もう少し、根は深いでしょうが、おおむねそれに近いでしょう」「根？」

「国の成り立ちをお教えた時にもお話ししましたが、倭はここ二十年弱の間に、先王陛下や王太子殿下、王女殿下など、王族を三人も失っています」

いずれも王位にあった者や、王位に近い者ばかりである。

絶対的な君主の血統が揺らぐことは、仕える者たちに不安と焦りを与え、安定しない政権は佞臣の存在を見逃してしまう。

「『国のため』と言う大義は、案外脆いものです。規模が大きすぎて、自分を見失いやすい。そのため、国を支える者の拠り所となるのが、『国王』なのですよ」

そう言う意味では、倭には今、貴族を含め国民の尊崇を集める王は

いない。

「その不安定な空気に、王弟殿下はどう関わっているのですか？」

「殿下は、言わば自らを抛り所にしたのですよ。自らに権力を集中することで、貴族を掌握しようとしている」

年齢的には不安が残るものの、不安定な状態から抜け出したい貴族にとっては、少々強引でもそれが求心力と捉えられる。

息子がいるのだから、王弟に気に入られれば次代も安泰だ、と思わせることもできた。

「……それって、国にとってはいいことですよね？国民が一つの旗の許に結束するのですから」

「純粹に、政治を正そうとしているのであれば」

「と、仰いますと？」

「貴族をまとめて、何をするかが問題、と言うことです」

ぴくりと肩が揺れた丁子を見て、信濃は口を滑らせたことに気付く。袖の中で握った手を開き、シワの寄った袴を撫で付けた。

「——とにかく、王を始め多くの機能が正常でない現在の政治は、やはり歪んでいるでしょうね」

「歪み……」

ごまかされたことを分かっているのかいないのか、丁子はむつつりと反芻する。

そして、最後に一つ、と前置きして尋ねた。

「歪んだ政治を変えることは、可能だと思われますか？」

「余程の賢者か暴君でも現れれば、変わるかもしれませんね」

どちらにせよ、一度根本からひっくり返しでもしなければ、この国は変わらないだろう。

世間話は秘密がいっぱい

講義後、丁子は回廊の欄干に凭れて同じく休み時間の子供たちを眺めていた。

鬼ごとなのか、広い庭園を走り回る集団の中に、ひととき目立つ子供がいる。

出身地域の習慣らしい、頭髪を布で覆った男の子。ヒースガルド人のクラウス・アベルだ。

今のところ、大陸の言語は古代ノルス語を語源とするものにほぼ統一され、倭、ノルスシュヴァイツ、レノン、ヒースガルドの四ヶ国間であればたいい通じるとされている。しかし実際は、小国の集合体であるレノンやヒースガルドの地方になると、いまだに言葉が違うことも珍しくなかった。吐晏などは国ごと別言語である。

その点クラウスは、両親が国を越える商人だけあって、言葉に不自由している様子もなく生徒たちに馴染んでいた。

ガキ大将の昌騎が上手く巻き込んでいる効果もあるだろう。

楽しげに遊びの輪に入っていくクラウスを目で追いながら、丁子は信濃の言葉を振り返った。

『貴族をまとめて、何をするかが問題なのです』

王弟が何をするか。何をしがっているか。

信濃はそれを分かっているような言葉を発したものの、屋敷勤めの侍女と言う身分の丁子に話すことではないと判断したか、詳しくは語らなかった。

言い方からして、王弟をよく思っていないようだ、と言うくらい

は分かる。ただ、最後の問いに関してはどう解釈していいか悩むところだ。

国は変わるか、と訊いた丁子に、信濃は王弟に代わる人物の存在を匂わせた。

あれは単なる彼の望みか、それとも誰か——言ってしまうえば真朱——を示しているのか。

信濃が何をどこまで知っているのかが判断できない以上、あの場で迂闊なことを口にするのは憚られた。

だけでも、と丁子は欄干についた頬杖を右から左に変えて、ついでに考える方向も変えてみる。

丁子を信濃に紹介したのは、他でもない真朱だ。彼女は幼い頃から、信濃に学問を学んだと聞いている。

では、真朱を彼に引き合わせたのは誰か。

彼女に高い教養が必要であると判断し、かつ高位である伯爵に教育を依頼できる人物。

「侯爵さまくらいしか、思い付かないなあ……」

浅葱なら、いつかのために真朱に知識を付けさせたいと思って不思議ではないし、元王族だったことを利用すれば伯爵相手にも多少の無理は利く。

そうになると、信濃が真朱の生まれを知らないと言うのは、仮定として苦しくなる。浅葱から真朱を任されたなら、彼らの関係は容易に想像できるからだ。

やはり、承知の上で黙っているのだろうか。

「……大人って複雑」

深いため息をついて、丁子は空を仰いだ。

もう半月もすれば短い雨季に入るだろうが、今日は穏やかな晴天である。

吸い込まれそうな青い空を、切れ切れに雲が流れていく。

二年前、地面に横たわって見上げた空は雪が舞うねずみ色だった。真朱は丁子を『拾った』と浅葱に言ったが、出会いはそんな優しいものではなかった。

門扉の前に倒れていた丁子を、真朱は堂々と踏みつけたのである。弱っているところに、思い切り体重をかけられて丁子は呻いたが、彼女は全く悪びれる様子なく『あれ、生きてた』と言っただけだった。

全くもって非人道的だ。

結局、後から来た藍が事情を聴いて屋敷に上げてくれたのだが、あの時ほど自分の選択に自信をなくしたことはない。

しかし、それから二年間もこうして真朱の元にいるのだから、人間何が起こるか分からないものだ。

閑話休題――。

「何してんの、ねーちゃん」

「先生に怒られて反省中？」

「……違う！」

うっかり失礼な言葉を聞き流しそうになり、慌てて過去に飛んでい意識を戻す。

見れば、欄干の向こうに先方の三人組がいる。クラウスは昌騎と敬の後ろから、丁子を窺がっているようだ。

そう言えば、まだきちんと挨拶をしていなかったと思い当たった丁子は、欄干を乗り越えて子供たちに歩み寄った。

「こんにちは、クラウド・アベルどの」

まだ背の低いクラウドの目線に合わせて屈み、にっこり笑いかける子供とは言え、他国の民だ。敬意をもって対するべきだと丁子は知っていた。

「私は王都の外れのお屋敷で侍女をしている、丁子と言うの」

「こ、こんにちは。クラウドって呼んで、いいよ」

クラウドは背中を手を組み、はにかみながらも挨拶を返した。幼いながらも、両親か周囲のしつけがよいのが分かる。

「分かった。私のことは好きに呼んでね。昌騎たちはたいてい――」

「貧乳ねーちゃん!」

「貧乳ー!」

「誰が貧乳だ!」

狙ったように囃し立てる昌騎と敬に、ほぼ反射で叫んだ丁子はずいずい鉄拳を見舞う。そして、ハッと振り返れば、クラウドが無垢な笑顔で首を傾げた。

「ひんにゅー?」

「変な言葉を覚えなくていい!」

丁子は昌騎を捕まえると、その頬をギリギリとつねり上げた。

「小さい子に変な言葉を教えるんじゃないやしません!」

「いたたた：ねーちゃん痛い!」

「私塾で教わったなんて知れたら、先生のお名前に傷がつくでしょう!」

「分かったよ!」

「全く:」

昌騎を放して、丁子は再びクラウドに向き直った。

「クラウド、それは女性にはとても失礼な言葉だから、使ってはダメ。皆は私を『お姉ちゃん』と呼ぶけど、ヒースガルドではそれを何と言うの?」

『とても』と言うところに力を入れた丁子に感じるものがあつたのか、クラウドが若干後ずさりする。

「……エルマナ」

「じゃあ、そう呼んでくれる？」

「うん。僕ね、ほんとのエルマナがいるんだよ」

「そうなんだ。どんな方？」

クラウドは小さな眉間にシワを寄せて考え込み、丁子を眺めてからパッと顔を明るくした。

「おっぱい大きい！」

「明らかに私と比べたでしょう！」

『貧乳』の意味は通じなくとも、この年頃の男の子は目の付け所が同じらしい。

「悪ガキには鉄拳制裁」も世界共通だと信じ、丁子はげんこつを振り下ろした。

「乱暴だよなあ」

「乱暴だよね」

頬と頭を撫でながら、昌騎と敬が囁き合う。

「女の人ってさ、もっとおしとやかなものじゃないの？」

「敬、女に理想を持つちゃだめなんだぞ。父さんが言ってた」

「それにしたって、ねーちゃんのげんこつ痛すぎ」

聞こえているのだが、と思いながら聞いていた丁子だが、次の昌騎の言葉に仰天する。

「言ってる。絶対にねーちゃんは王女さまじゃないよ」

「王女さまって？」

予想外の方角から飛び出した話題に、思わず声が大きくなる。

「昌騎、それは何の話し？」

丁子が勢い込んで尋ねるが、その焦った様子がまたも彼らのいたずら心に火をつけた。

「ひーみーっ」

にやりと笑って昌騎と敬が駆け出し、すっかり二人に慣れたクラウスが後に続く。

「ちょっと待ちなさい、昌騎」

「教えてあげな―い」

もちろん追いかけた丁子だが、授業の再開を告げる教室に逃げ込まれてしまった。

邪魔をする訳にもいかずに戸口で地団駄を踏む丁子に、しかし折よく顔見知りの講師が通りがかり、声をかけてきた。

「冬眠明けの熊みたいですよ、丁子さん」

「誰が腹を空かせた猛獣ですか！」

貧乳の次は熊。それも講師にまで言われるとは。

丁子は肩を落とす。

「冗談です。どうしたのですか？」

「子供たちが、私は王女さまじゃないと言ったので、どう言う意味かと……」

「ああ、それ」

若い講師は苦笑いで答えた。

「今、子供たちの中で“王女さま探し”が流行っているのですよ。誰が始めたか分かりませんが」

「王女さま探し？」

「ええ。朱華殿下には実は姫君がいて、やむにやまれぬ事情で平民に身をやつしておられる。と言う話で。女子と見るや『実は王女さまじゃないか』と問うて遊ぶのです。今や市井の子供にも広がっているそうです」

「それはまた……」

心臓に悪い遊びだ。

前提の話がほぼ真実であるから、余計に。

だが講師は、丁子とは違った方向に捉えていた。

「朱華殿下に対する、侮辱と見られても仕方のないことなのですが。」

信濃さまは、子供の遊びだからと静観の構えです」

「まあ、通らない言い訳ではないですね」

丁子が信濃に同意の姿勢を見せると、講師は弱りきったように肩を竦めた。

「私は王弟殿下の耳に入りはしないかと、戦々恐々です」

「それまでには、先生が手を打つと思いますよ？」

信濃も痛い腹を探られたくはないだろうし、王弟との間に波風を立てても、私塾ごと潰されるだけだ。

「そう願いたいものです。私はここで、子供たちにものを教えるのだけを取り柄ですから」

では、と去る講師を見送って、丁子も夢見亭へ帰るべく踵を返した。

「知ってはいるけど、自分から動くつもりはないってところかな」

信濃の書房がある棟に視線をやる。

「本当に、大人って複雑」

転がるご機嫌つかまえて

丁子が帰宅した時、珍しいことに真朱は母屋で縫い物をしていた。母屋にいることもそうだが、丁子の記憶では裁縫は主人の苦手なもの。の三番目までには必ず挙げられる。

それなのに真朱は、厚い敷物を床に広げ、その上に用人の老女と一緒に座り込んで手を動かしている。

「真朱さま、丁子です。ただいま帰りました」
声をかけると、老女の方が顔を上げた。

真朱は眉を寄せて布地と格闘していて、丁子に構っている余裕はなさそうである。

「まあまあ、丁子さん。お帰りなさいまし」

「ただいま帰りました、妙どの。何ですか？この着物と布の山は」

「お嬢さまのご衣裳でございます」

丁子が隣に腰を下ろすと、老女——妙は^{たえ}楽しげに大袖を広げた。

「それは、確か昨年仕立てたものでは？」

「ええ。そろそろ暑くなりますから、昨年の夏物を直しているのですよ」

「へえ」

以前から感じていたことだが、真朱には自ら着飾るという概念がない。

女性——特に貴族には、装いで豊かさを示すところがあった。高価な生地を使って流行りの意匠を凝らし、次の年には新しいものを仕立てるのだ。酷い時には一度着た衣裳は二度と袖を通さない、なんて話もあるらしい。

その点、真朱は衣裳の新しさや派手さにこだわりがないらしく、衣としての体裁に問題がなければ何年前のものでも構わないと言っている。

その言葉を支えているのが、白磁の妻である妙だ。彼女が衣裳に手を入れて、まめに襟を変えたり刺繍をしたりするので、流行りのものではなくとも彼女の衣裳は充分着回しが利くのである。

「その大袖は、どうなさるのですか？」

「こちらは、袖口に刺繍をお入れするのですよ」

「袖口だけ？」

「ええ。控えめの方が、かえって上品に見えるものですわ」

ふくよかな顔を和らげ、妙は年齢を感じさせないほど正確に、針穴に糸を通して見せた。

「では、私も――」

「痛っ」

手伝おうかとしたところで、真朱が声を上げた。

何事かと二人が目を向けると、渋い表情で親指をくわえている。

「……刺した」

「あらあら、お嬢さま。何度目です？」

先端が細いので刺し傷もささやかなものであるが、これ以上、荒れない手に傷をつける前にと、妙が真朱から針を取り上げた。

「ですから、これは妙がすると申し上げたでしょうに」

「一体何を縫っておられたのですか？きれいな絹ですけれど……」

丁子は、さらりとした手触りの布を受け取り、広げて矯めつ眇めつした後、恐る恐る尋ねた。

「これは……雑巾、で、ございますか？」

「手巾だよ」

「は……」

「……」

じと目で不満を訴えられるが、丁子の常識が手の内のものを手巾とは認めない。

百歩譲って縫い目の荒さと不揃いは目を瞑るとしても、四隅からほ

つれが目立つし、均一の力で縫わないからか布地にシワが寄って全体の形が崩れている。そして、中央を縫い目が交差するようなものは、手巾とは呼ばない。そのまま、子供が母を真似て作る雑巾であった。

「もったいない。せっかくの絹が……」

丁子は一反の値段を考えそうになって嘆息する。

しかし職人が丹精込めて仕立てた衣裳を駄目にされるくらいならば、絹のはぎれでも与えておこうと言う妙の判断は正しい。非常に正しい。

「こう言うものは、気まぐれに手を出されても上手く行きっこありませんわ。そうでなくとも、お嬢さまは裁縫が得手でらっしゃらないのですから」

丁子から見ても驚異的な速度で針を進めつつ、妙が諫めると、真朱はプイと明後日を見た。

「妙を手伝おうと思ったんだよ」

「そのようなことを仰っても、妙は分かっておりますよ。藍さまがおいでにならないから、退屈してらっしゃるのでしょうか？」

子供の言い訳にしか聞こえない主人の言い分に、話題が横滑りした。

そう言えば、と丁子が辺りを見回す。

「藍さんはお留守なのですか」

「ええ。朝食の後すぐに」

道理で、丁子が帰宅してから藍の顔を見ていなかった。

とは言え藍が外出するのは、実はそれほど珍しくない。屋敷にの間こそ主に付きっきりの彼だが、時折ふらりと姿が見えなくなる。

長い時には一月近く帰らないこともあった。

そうして藍が不在だと、真朱は暇を持て余していつも以上に丁子を構い倒し、用人たちにちよっかいをかけて回ると言う、困った習性を発動させる。

いつそのこと、書房で本でも読み漁っていてくれた方が平和だ。

「どうせね、私は不器用だよ」

へそを曲げた真朱が、裁縫を諦めて房室を出て行く。

丁子はそのまま手伝うつもりでいたのだが、妙は首を振った。

「こちらは結構ですよ」

「でも……」

「藍さまがおいでにならないのですから、貴方がお側に。唯一の侍女なのですよ」

優しく重ねられて、丁子は自分の仕事を思い出す。

どれほど和気あいあいとしても丁子は侍女であり、用人ではない。その本分は常に主人の側で控え、不自由がないか気を配ることだ。

「…失礼致します」



「走ると白磁に叱られるよ」

「走ってはおりません。早歩きです」

追い付いてぺろりと舌を出すと、丁子は居間の扉を押し開けた。

相変わらず書房から溢れる書物を避けながら、真朱は寝椅子に腰を落ち着ける。

丁子も下衣にシワを作らないよう気を付けながら、小さな椅子に座った。

「今日、少し先生とお話ししました。先生は、真朱さまのことをご存知の上で黙っておられるように思えましたけど…」

「そうだね。存外あの人腹黒いし、何考えているのか分からないけ

ど」

「ああ……黒いですね」

子供に恐怖を植え付ける笑みは、一度見たら忘れられない。

「まあ、バレることを見越して浅葱が教育を頼んだんだから、口外の心配はしていないよ」

「先生はそう言ったことはなさらない方ですしね」

「もう少し野心って言うものがあれば、十分出世できるのにね」

肘置きに頬杖をついて、真朱は苦笑した。

その様子から、信濃に対して特に警戒する必要はないのだろうと判断する。

「伯爵に余計なことを言わないんだよ。確かなことを言わないから、知らぬ振りもできるんだから」

一人で納得した丁子を見越したように、真朱が釘を刺した。

「……気を付けます」

「よろしい」

尊大に頷いた真朱と、二人で笑い合う。

「……あ、そうだ真朱さま」

「何？」

「結局、宰相閣下の件はどうなさるおつもりですか？」

「む……」

眉根を寄せて、真朱は寝椅子に倒れ込んだ。

「いつそ来なければいいのに」

「でも真朱さま。昨日の閣下の言葉は素敵でしたよ」

『人生の最後まで責任を持つ』なんて、捉え様によっては口説き文句だ。

「バカ正直な天然が言うことだよ。そんなこと全く思っていないだろうね」

「でも、玉の輿ですよ」

「丁子、私はあのヘタレより高貴な生まれなんだけど」

「そうでした。逆玉の興です」
「あんなのこっちから願い下げ！」

そいつは予想外

前日にどれほど劇的な出会いがあっても、王宮ではいつも通り冷遇される日常が待っていた。

馬車の窓から夜の闇を眺めながら、一日を振り返って月白は嘆息した。

朝議こそなく、面と向かって嘲笑されることはなかったが、任される仕事は報告書に押印と署名をするだけ。内容を吟味することを求められていない事實は、王宮で宰相と言う役が、いかに軽視されているかを嫌でも月白に知らしめる。

「お帰りなさいませ、若旦那さま」

外門につけた馬車の扉を、家令の雲井（くもい）が一礼して開いた。

家令は常に月白の側に控える従者とは違い、伊勢家の財政や所領の管理をする役である。

貴族は自分の領地と王都を行き来するのが常で、伊勢家も王都に近い陽慶ようけいと言う都市を拝領している。しかし月白はあまり王都を離れないので、頻繁に雲井が陽慶と王都を往復しているのだ。

ちなみに月白は、王宮などに伴う常磐からは公的な肩書きである“大公”と。一方で家政に携わる雲井からは、“若旦那”と呼び分けられている。

「変わりはないか？」

決まり文句を口に出してから、浅葱が昨日、白磁に同じように問うていたことを思い出す。

雲井の答えもまた定型だった。

「はい、若旦那さま。詳しいご報告は後ほど」

そして、いつもならすぐ月白を邸内へ促す家令は、軽く会釈をして

から御者台の常磐を見上げた。

「常磐どの、馬車はそのままです。すぐに若さまがお出掛けになります」

「藤が？」

顔をしかめた月白が屋敷を振り返ると、玄関から弟が出てくるころだった。

敢えて地味な装いを選ぶ彼と、常に流行を意識した衣装を纏う弟は、見た目からして正反対だ。

次男と言う気楽さからか、弟は最低限の教養だけを身に付けると、遊学と称して国内外を飛び回り、夜会を渡り歩いている。

おかげで、世間の流行や噂話など、月白より詳しいことが多々あった。

その噂話の当事者に、弟自身がいることが多いのは、月白にとって頭の痛いことである。

佳人と名高かった母譲りの甘やかな美貌と、人を魅了することに長けた性格で数々の女性を籠絡し、弟は十八にして既に十分すぎるほどの浮き名を流しているのだ。

それも軽薄なものではなく、どここの令嬢にも熱烈な歓迎を受けているらしいと言うから業腹だ。

とまれ、実直だけが取り柄の月白とは違い、弟は自分をいかによく見せるかを心得ている。

柄入りの襟に、細かい刺繍の施された白い袍に薄紫の帯を締めた弟は、長靴（ちょうか）の底を鳴らしながら、従者を伴って歩いてくる。

「やあ、兄さん。お帰りなさい」

「ああ。淡藤（あわふじ）はどこへ行くんだ？」

「夜会にね。ヒースの宝石商がわざわざ来ているって話なんだけど」

「お前、宝石に興味があるのか？」

帯を飾る石などは確かに高価なのだろうが、と思いつながら尋ねると、淡藤は「まさか」と首を振る。

「興味があるのはお嬢さんたちさ。贈り物にいくつか見繕いたくていくつか。」

弟のことだから、送り先は全て別の相手だ。

「宝石商も家族を連れて来ているらしくてね。令嬢が大層な美人だとかで、噂になっているんだ。ヒースの豪商の、手中の珠を垣間見るのも悪くないでしょう？」

「お前は……」

さも楽しそうに言う弟に頭を抱えなくなる。

「兄さんも、つまらない仕事ばかりしていないで恋人の一人でも作ったら？」

「つまらないと言うな」

「本当に頭が固いな。何なら紹介してあげるよ。どんな人が好み？それか、出会いはないの？」

「出会いと言ったって……」

月白は一番最近会った異性を思い返す。

齒に衣着せぬ言動で、月白をヘタレと称したあの女。

確かに容貌は浮世離れした美しさがあったが、中身があれではこちらから願ひ下げだ。

どちらかと言えば、控えていた侍女の方が常識がありそうだった。

いやしかし、あの女を主人に持つくらいだから、侍女の方も一癖二癖あるかもしれない。

「……女に幻想を持つと痛い目を見る」

ぼそりと呟けば、淡藤は驚いたように瞠目した後、大声で笑い始めた。

「兄さんにそれを悟らせる女性がいた訳だ。どこの誰？その様子じゃあ、フラれたんでしょ」

「フラれるほどの関係にもなっていない！」

「親しくなる前に袖にされたんだ。大丈夫だよ、兄さん。女性はその人だけじゃあないからね」

ねえ、と淡藤が水を向ければ、達観した年齢の雲井と常磐は、ほくほくした笑みで頷いた。

「ああ、でもどうかな。わざと冷たくして、兄さんの気を引く作戦かもしれないよ。兄さん顔はいいんだし、その人も押せば意外と……」

「いい加減にしろ、色ボケが」

肩に腕を回してくる淡藤に肘うちをして、月白は息をついた。

「若さま、そろそろお時間が……」

まだ若く、主人たちの会話を聞いているしかなかった淡藤の侍従が、そろりと促す。

「あ、そう。じゃあ行こうか」

嬉々として兄に絡んでいた淡藤は、あっさり切り上げて馬車に乗り込んだ。

よほど夜会が楽しみだと見える。黙って見送ろうとした月白だったが、短い逡巡の後に窓から声をかけた。

「藤」

「何？」

ガラスの嵌め込まれた窓を押し上げて、淡藤が顔を出す。

「……あまり、ヒースガルドに深入りするな」

今はまだ交易が保たれているが、浅葱の話を聞いた後ではかなり不安がある。

何とか王弟の思惑を潰したいとは思っているが、最悪の場合、ヒースガルドと戦争になる可能性も否定できなかった。

「それはまあ、向こうのお嬢さん次第かな」

「藤！」

「はいはい、気を付けます。じゃあね」

窓が閉まり、常磐と交代で侍従が御者台に上がる。

「全く……」

遠ざかる馬車を眺めていた月白は、後ろから妙に生暖かい視線を感じて振り返った。

「……何だ？」

門の前で、雲井と常磐が笑顔で月白を見ている。

雲井はひとつ咳払いして、

「古来より、女性は男性より数が多いですからな」

「は？」

「若旦那さまは確かに若さまと違い、少々バカ正直なところがございますが」

「待て。今、私をバカと言ったか？」

「しかし、実直であるのは間違いなく若旦那の美点でございます」

「ええ、その通りですとも雲井さま。大公さま、それを認めて下さるお方が、必ずや現れますよ」

「希望を捨ててはなりません」

「人の話を聞けえ！」

うんうんと頷き合いながら、常磐たちは勝手に話を完結させている。公の場では完璧に月白を立てる彼らだが、内輪だけになると途端に孫でも見るような目になるのだ。

こうなった彼らを止めることは不可能である。

「藤のヤツ、いつか見返してやる」

それが兄の言う台詞ではないことに気が付かないまま、月白はようやく屋敷の門をくぐった。



伊勢家の家長として、月白がこなさなければならない仕事は、宰相のそれとは別にある。

最たるものが領地の経営だ。

陽慶は交通の要所である立地に加え、腕のいい金細工の職人が多く集まる地域であるため、潤沢な収入がある。

しかし領地を生かすも殺すも、領主である月白次第。恵まれた条件に胡座をかいていれば、領民はたちまち背を向けるだろう。そうならないよう、王都にいる間も領地との連絡は欠かせなかった。

書房の机には、雲井が届けた経理関係の報告書や領民からの上奏が積み上がっている。

雲井を下がらせた後、月白はその全てに目を通し、必要な上奏には返信をしたためて――いなかった。

「問題は、どうやってあのわがまま娘を引っ張り出すかなんだ」

「なかなか、気難しそうなお嬢さまでございますね」

重ねられた報告書を枕にして、月白は机に伏せる。

話し相手は常盤だ。

「傍若無人なんだ、あれは」

「しかし大公さまは、その方を王弟殿下の対抗馬となさるお心積もりなのでしょ」

「そうだ。今はとにかく王弟の目を逸らしたい」

「では、いかがなさいます？」

それが問題なんだ、と月白が唸る。

まさかいきなり朝議に連れ出す訳にはいかないし、かと言って非公式に王弟に引き合わせようなら即日、消されかねないのだ。

適度な証人が必要だが、今の段階で王弟を敵に回してまで、真朱を認める者は限りなく少ないだろう。

「一度、王宮で認められれば話は早そうなんだがなあ」

あの強烈さは、昔を懐かしむ老臣たちの目に、朱華の再来と映るかもしれない。

「とにかく。次の話し合いは向こうから日程を指定してくるだろうから、それまでに改めて浅葱と戦略を練らなければ」

「戦略なのですか」

「ああ。あの娘に口で勝つのは相当難しい」

「ご武運を」

常磐が頭を垂れたところで、下がったはずの雲井がおとないを告げた。

「若旦那様、文が届きましてございます」

「入れ」

雲井が持つて来たのは、文箱もなく畳んだだけの簡素なもの。

宛名は流れるような筆跡で『白どの』とだけあった。

「誰からだ？」

「誰何いたしたのですが、結局名乗られず…。若い男の方でございました。容姿は倭の方なのですが、ノルスの宗教者に似た長衣と首飾りを」

「いい、分かった」

条件に合致する人物には、昨日会ったばかりだ。

しかし、個人を特定されたいのかされたくないのか。

名前を名乗らないのが用心ならば、服装も目立たないものを選ぶべきだ。それを失念するとは到底思えないだけに、彼の思惑が分からない。

更に、昨日の今日で文を出してくる理由も分からない。

「若旦那さま、いかがいたしましたでしょうか？」

「構わない、こちらへくれ」

「はい」

恭しく差し出された文を一通り観察し、月白は包み紙を外す。

随分と薄い、と感じたのも当たり前で、中身は二つ折りにされた質の悪い雁皮紙だった。

粗末な紙はどこにでもあるような物で、それから差出人を推定するのは不可能だろう。文自体はどこに落として来ても問題ない訳だ。文面も余計なことは一切なく、簡潔極まりない。

『再びお会いしたく候。』

三日後、お一人で来られたし。

真』

「……雲井、これは何に見える」

「果たし状かと」

「応じなければどうなると思う」

「闇討ちでもされるかと」

「大公さま、どちらでこんな分かりやすい恨みを買われたのですか？」

「……………」

あるのは自信、そして見栄

二度目の内談は、初の顔合わせから四日後の夜と決まった。

真朱が文を出して、月白が応じる形である。

その文の内容など、侍女である丁子は知る由もないことだ。

ついでに、その内談を当日まで知らされていなくて、準備に追われたとしても本来は文句など言えない。

「丁子、私にはそれが凶器に見えるのだけど」

「嫌ですね、真朱さま。ただの櫛でございます」

鏡台の前に座る真朱に、丁子は笑顔で返す。

手には象牙の梳き櫛があった。

鏡越しにしばし無言で見つめ合い、白旗を上げたのは真朱だ。

「……分かった。予定を伝えなくて悪かったよ」

「全くです。お客様がおいでになるのなら、仰っていたただかなければ困ります」

侍女は主人の予定が滞りなく進むよう、先回りして働かなければならない。

だと言うのに、真朱から来客の予定を告げられたのは昼食後。準備の計画すら立てていない状況に、絶望したのも無理からぬことだった。

とにかく真朱を湯殿に叩き込んで、その足で妙に指示を仰ぎに行った。

さすがに年の功と言うべきか、妙は「あらあら」と目を丸くしただけで、特に動じる様子もなく準備を請け負い、丁子には真朱の身支度を頼んだ。

細かなことは妙や白磁に任せておけば間違いないので、丁子是这样して一つのこと集中してられる。

「髪飾りはどれになさいます？」

緩い巻き毛を頭頂部に寄せながら尋ねると、真朱は鏡台に並べられた飾りを選び始める。

その間に丁子は、香油を髪に馴染ませ、根本を括ってから拳大の玉を作る。

癖のある髪は、まとめるのにコツが必要だ。

初めは梳るだけでも髪を絡ませ、丁子に任せたら半月で禿げ上がると嘆かれたが、近頃では手慣れたものである。

わざと残した後れ毛を肩に流し、真朱が選んだ銀の釵を挿して終わりだ。

「完了です」

「ありがとうございます」

「ああ、くれぐれも形を崩すようなことを、なさいませんように」

「はいはい」

椅子から立ち上がる真朱に釘を刺して、丁子は道具を片付ける。

「真朱さま、藍さんはまだ戻られないのですか？」

月白との会談に、控えるのが自分だけと言うのは不安があった。

藍が時間までに戻らなかったら、白磁は代わりに立ち合ってくれるだろうか。

「藍なら、もう戻るよ」

答える声が、屈んでいた耳元で聞こえて丁子は驚く。

何故だか真朱がとても近くにいたらしい。上げようとした頭に微かな重みが加わった。

「真朱さま？」

振り返ると、その動きに合わせて何かが視界の端に揺れる。

何かと思って鏡を見れば、藤を模した步揺が髪を飾っていた。

「貸してあげるよ」

「こ、困ります……」

慌てて外そうとするが、伸ばした手は真朱に掴まれる。

「気に入らないって？」

「違います。こんな高価なもの、つけられません」

歩くと音を立てて揺れることから名付けられた歩揺は、繊細な細工なだけに値が張る。当然、質素な服に合わせるようなものではないし、侍女が身に付けるものでもない。

それでも真朱は、何のかんのと歩揺を外すのを許さなかった。

「良家の子女は、歩きの訓練で書物を頭に載せると聞きますけれど、そんな気分ですね。緊張します」

「歩揺一つで何言ってるの。本物のお嬢さまは皆、釵やら歩揺やらをいくつも挿すんだから」

「世のお嬢さま方は、肩こり持ちだと思います」

「緊張で？」

「はい」

丁子が真面目な顔で言えば、真朱は声を上げ笑った。

「落としたらどうしよう。私、とても弁償などできませんからね」

「大丈夫、給金から天引くから」

「ええ!？」

「冗談。――ほら、誰か来たよ」

明るい声に、回廊の床板の軋みが重なる。

真朱の居室を囲む回廊は板が僅かに浮いていて、踏むとキシキシと軋むのだ。

白磁に訊けば、「古いお屋敷ですからね」と苦笑され、特に支障もないのでそのままになっている。

丁子は扉まで出迎えに立つが、頼りなく揺れる飾りが気になって、つい足取りが慎重になった。

それを見て、また真朱が肩を揺らす。

ムツとしながら扉を開けると、三日ぶりの藍の顔が現れた。

「楽しそうだな」

「あれ、藍：さん？」

言い淀んだのは、藍が見慣れない出で立ちだったからだ。

いつもはノルス風の衣装を好んで身に付けている藍が、どうしたところか今日は倭の平服である。

彼が選ぶノルスの服は白か黒が多いため、鮮やかな色目の袍は違和感すらあった。

「お帰りなさいませ」

「ああ。随分とめかし込んでるな」

ちょうど目線の高さにあるのに気付いたのか、藍が指で歩揺をつついた。

「これは真朱さまが…」

「ああ」

軽く相槌を打って、彼は丁子から真朱へ視線を移した。

「どうだった？」

真朱は三日も外に出していた藍に労いの言葉もなく、用件を口にする。

しかし藍の方も、そう言うことを気にしない性格なのか、それに対して不満はないようだ。

「とりあえず了承した。言われた通り、弟の方を連れて来たけど、先に会うか？」

「その方が面倒がないね。——丁子もおいで」

「……はい」

またしても丁子の予定が狂う。

彼女たちの間で、丁子の預かり知らぬ事態が動いているのは、特に珍しいことではない。

滅多に屋敷から出ない真朱が世情に疎くないのは、藍を目や耳のように使って情報を得ているからだ。そして時に、彼は遣いとして真朱の手足となる。

藍が他の用人から一目置かれているのは、そうした特殊な役を負う

に値する、真朱からの信の篤さもあってこそらしい。

今のところ、丁子は真朱からその手の仕事を指示されたことはなく、自主的に私塾や市場で噂を集めてくるのが精々だった。

「よく三日で了承を取り付けたね」

「真朱がやれと言うからだろう。それに、思ったより話の分かる奴だった」

真朱と藍が、軋む板張りの回廊を抜けて母屋に向かう。

「藍さん、弟さんがいらっしゃるのですか？」

二人を追いながら尋ねると、藍は「いやいや」と手を振る。

「俺の弟じゃない」

「では、どなたがおいでに？」

「どこぞの宰相の弟だよ」

引きずる袴に辟易した様子で、真朱が裾を摘まんだ。

本当に、自分の屋敷では体裁を気にしない人である。

「閣下の？ どうしてまた」

「必要だからね」

短く答えて、彼女は客間の扉に手をかけた。

外郭から攻めな（前書き）

T h a n k s

t i t l e ↓ 『おどろ』 さま

外郭から攻めな

丁子は入り口付近に控え、宰相の弟だと言う客人を観察する。そして、夢見亭にはあり得ないくらいに来客が続くなあ、とぼんやり考えた。

しかも来る客は皆、かなり身なりがいい。

目の前の男も服装こそ普段着のような形だが、生地はどう見ても絹だし、帯や腕輪に付けられた飾り石は、それこそ丁子の給金が何年分必要になるのか、考えもつかなかった。

母屋にはいくつか客間があり、今日の客人を通したのは十畳ほどの板張りで椅子などは置いていない。

平伏する男の脇を通って真朱が上座につくと、その後ろに藍が座る。

「顔を上げて」

「はい」

男は頭を上げると、一度しっかりと真朱と目を合わせて礼をとる。

両頬に垂れていた髪が肩へ流れ、露になった容貌に丁子は感嘆した。月白の血族ならある程度、顔も似かよっているのかと思っていたが、どうやら似ていない兄弟と言うのはどこにでも存在するらしい。よくよく探してみれば、似ているところもあるかもしれない。しかし、全体的な雰囲気は全く別物だ。

月白は“黙っていれば”冷厳な美丈夫だったが、こちらは匂いたつばかりの艶がある。

（男の人に色っぽいって言うのも変だけど……って、いけない。仕事だった）

こんな仕事なので、色恋の話題で盛り上がる相手こそいないものの、丁子も十五歳の女子。見目麗しい異性に心踊らせるのも当たり前のことだったが、弛みかけた表情を慌てて引き締めた。

丁子の目を釘付けにした男は、その声音までも耳に心地よかった。

「殿下のご芳顔を拝し、恐悦至極に存じ上げ奉ります。本日は侍従どのお引き立てに与りまして、伊勢淡藤、罷り越す運びと相成りましてございます。殿下のお心に添えますよう、忠実なる臣として精進いたす所存にございますので、行く末永くご贔屓ならびにお引き立てのほど、伏してお願いを申し上げます」

宣誓ともとれる口上を述べ、淡藤が再び頭を下げた。

何故、宰相の弟が夢見亭にいるのか。何故、真朱の身分を知っていて、初対面で忠誠の宣誓をするほど真朱を信じられるのか。

疑問はいくつも浮かぶが、問うことを許されていないこの場では、丁子は想像するしかない。

初めは月白繋がりで、兄と同じように説得に來たのかとも思った。しかし藍が間に入っているとすると、淡藤を呼び寄せたのは真朱に企みがあったのことだろう。

そして真朱の考えることは、それが形となって目の前に披露されない限り、丁子に推し測れるものではなかった。

脇息にもたれて口上を聞いていた真朱は、感心しきりの顔で彼を眺める。

「よくそれだけ口が回るものだね」

「ありがとうございます」

「でも堅苦しいのは嫌いな。王女ぶる気もないから、殿下は止めて」

「畏れながら。私は殿下に忠誠をお誓い申し上げます身なれば」

「名前で呼ぼうが敬称で呼ぼうが、忠誠心に差があるとは思わなければだね。それに……本当に忠誠心の篤い臣下は、私の顔を正視し

ない」

真朱は頬杖をついて、口角を上げて見せた。自分より身分の高い人間と対する時、顔を直視したり目を合わせるの是不敬とされる。

真実、彼女を王女として遇するつもりなら、顔を上げる許可が出ても淡藤は目を伏せていなければならなかった。

あれだけの口上をすらすら流せるのに、それを知らないはずがなく、失態は意図的だと真朱は言いたいのだ。

「私は、貴方に忠誠心なんて欠片も求めていないよ。欲しいのは貴方の持つものだからね」

淡藤がただの礼儀正しい貴公子でないことは、丁子にもすぐ知れた。「……では、失礼して」

淡藤は、床についていた手を膝に置き、まっすぐ背を伸ばす。

「……僕なりの予防線だと思ってくれるかな。実家が無駄に大きいせいで、下手なことをすると言われているから」

真朱と対等に向かい合う姿勢で口調までも砕けた淡藤に、今度は啞然とする丁子である。

仮にも王女として拝礼した相手に、許しが出たからと言って掌を返したようにぞんざいな口が利けるものなのか。

（肝が座っているって言うのか、話が分かるって言うのか）

「藍から私の人となりは聞いているよね？」

「肩書きに拘泥しない人だと言うことは。でも、百聞は一見に如かずとも云うでしょう」

「まあ、確かに」

頷いて肯定を示し、真朱は席を立った。

淡藤に近くへ来るよう命じるのではなく、自分から彼に寄って行く。そのまま初対面で保つべき距離をあっさり越え、彼の正面に座り込んだ。

五尺ほどの間は置いているが、膝を付き合わせる格好にさしもの淡

藤も若干引く。

しかしすぐに微笑みを浮かべて口を開いた。

「綺麗な黒髪だと思ったけど、顔も美しいね」

「ありがとう」

「化粧とかしてないでしょう？この距離で白粉の臭いもしないし。

それが素顔なら相当な美人だ」

「美人は三日で飽きると云うけれどね」

「大丈夫。郎女いらつめどのは中身も十分、魅力的だと分かったから」

見合いか、と突っ込みを入れたくなった丁子だが、代わりに藍が鼻で笑った。

「藤、初対面で口説くな」

「可愛い子がいたら、声をかけるのは男の性だよ。それに、女性に幻想を抱くことが愚かだと、兄に悟らせた人だからね。どんな人か興味がある」

「大公の旦那は、あの年で女に幻想を抱いていたのか？」

「単純な人だから。でも郎女どのになら、僕でも抱きそう。白い肌には慎ましさを、華奢な体には儚さを感じるよ。なんてね」

実際には、慎ましさは真逆の口達者で、回廊を裸足で駆け回るおてんば娘である。柿や桃の木に登って実をもいで来る姿には、儚さなど皆無だ。

だが彼も「幻想」と言ったからには、藍から現実を諭されているのだろう。

それでもなお口説く男の性とやはらは、丁子には理解できなかった。

「……アンタ、生まれる国を間違えてるぜ」

「君が言うならそうなんだろうね」

可哀想なものでも見るような目付きで言葉を交わすと、藍も上座から下りて真朱の脇へ席を移す。

「それで、本題なんだけれど」

「うん。藍からおおよそのことは聞いているけど、楽しい計画を立

「っているよね」

「楽しくない。貴方の兄上に引きずり込まれて、いい迷惑だよ」

「そう言いながら動くんだね。郎女どのは素敵な人だ」

この頃には、何となく丁子にも分かって来た。

淡藤と言う男、呼吸するように甘言を弄するらしい。

意識しているのかいないのかはどうでもいいが、最低限、相手を見て使わなければ効果のない特技であることは間違いない。

真朱などは、頬を赤らめるなどの初な反応をする訳もなく、ごく普通に受け流した。

「素敵な私を手伝ってほしいんだよ。貴方の人脈を最大限に利用したい。――特に貴方が昨日、渡りをつけた人とかね」

「ああ、だから」

淡藤は何事かに納得して、一人で頷く。

「あれは僕への試験かと思ったけど、本命だったんだ」

「時間がないから、無駄なことはいらないよ。でも二日で顔を繋げられたのは意外かな。さすが、当代一の色男の名は伊達じゃないと言う訳？」

「その名前のお陰で随分と警戒されて、話を聞いてもらうまでが大変だったよ」

肩を竦める姿は、いかにも雅人然としている。

「でも、状況を話したらその日の内に父親まで説得してくれたからね。なかなか強かな女性だよ」

「同族嫌悪しそう」

「それはないと思う。郎女どのは根本的に違う人種だから」

そう答えた淡藤には、そこはかとなない疲労感が漂っていた。

いよいよ嫌いになりそうです

丁子は彼の言う“人種”が非常に気になったのだが、真朱はこの場
にいないなら聞いても仕方がないと言うように話を畳んでしまう。

「どんな人かは、会えば分かるとして――丁子」

しかも彼女は丁子に話を振ったのだ。

「はい」

名指しで呼ばれて黙っている訳にもいかず、控えめに応える。
すると真朱の視線を辿った淡藤が、初めて丁子を振り返った。

丁子はどんな挨拶が来るかと密かに身構えていたのだが、そもそも
扉に背を向けていた淡藤は、丁子がいることに気付いていなかった
らしい。

何度か口を開閉させるが、どれも言葉にならないと言う驚きように、
図らずも彼の死角にいた丁子は詫びも含めて礼をした。

「真朱さまの侍女を務めております、丁子にございます」

髪に挿した歩揺が華奢な音を立て、それで我に返った淡藤は、軽い
黙礼で応える。

彼はそのまま真朱へ向き直ってしまい、丁子に声をかけることはな
かった。

(ひ、ひどい……)

期待していた訳ではない。断じて期待などしていない。

それでも、一言もなく挨拶を流されるのは丁子をへこませた。

彼の広そうな守備範囲から自分は外れていたのだろうが、だからと
言ってそこまで明け透けな態度をとらなくてもいいじゃないか。

丁子の不満を見てとった真朱と藍が、さも愉快そうににたとえ笑
っている。

それも癪に障るので、丁子は淡藤を視界から追い出した。

「真朱さま、ご用件を」

「ああ、うん」

真朱はいつもと変わらない調子で言った。

「今日いっぱい、あなたを侍女の任から解くから」

「……えええ!？」



しばらくして、本来の客である月白がやって来た。

「商人に対する増税が可決された! 王弟の思うつぼでは——藤!？」

白磁に案内されて来た彼は、客房に入るなり憤激遣る方ないと言う様子で吐き捨てたが、真朱と向かい合う弟を見留めて顎を落とす。その顔が、意外にも先程の呆けた淡藤とよく似ていたものだから、丁子は少しだけ気分が晴れた。

真朱の侍女を名乗った直後の解雇通告には胃の縮む思いをしたが、同時に告げられた新たな役割と彼女の真意は、丁子が負うには荷が勝ちすぎるものだったのだ。

かと言って、拒否と言う選択肢は元より持っていない。受けるしかない。決意を固めたところでの、月白の登場である。

「お前、一体ここで何をしている!？」

「落ち着きなよ、兄さん。ほら座って」

今にも自分を締め上げそうな兄に席を譲り、淡藤はその下座——丁子に近いところに座を改めた。

「増税が可決されただって？」

月白はまだ何か言いたげにしていたが、真朱から問いかけられて諦めたらしい。

「ああ。軍部も大臣も欠席多数で、何が過半数だ」

「王弟のごり押しも、愚かな貴族の追従も、今に始まったことじゃないよ」

理不尽がまかり通るのは世の常であると丁子も知っているが、王宮で通る理不尽は規模が違う。

生活に直結することを、強権への追従で左右されたのでは、民衆はたまったものではない。

月白は深く息をつき、行き場のない憤りを沈めた。

「……浅葱も欠席だ。ここへ来るとも伝えたが、返事の文もない」

「好きにしろと言うことでしょう」

「……私は王弟が戦争の準備を整える前に、貴女が存在を公にして止めたい」

「水を差すようだけれど。私は今回の件で名乗りをあげるつもりはないよ」

「この期に——」

及んでまだ言うか、と気色ばんだ月白が片手で膝を押し、腰を浮か

せる。

（単純な宰相だなあ……）

前回と似たような展開に、丁子は無礼と承知で月白の気の短さを貶した。

当然だが、心の中で控えめに。

それからやや遅れて、前回と同じ人物がもう一人いたことに気付いた。

（――藍さん！！）

倭の衣装でも、帯に吊った剣は変わらない。

前回は真朱から手を出したにも関わらず、月白が自分の刀を探しただけで、その喉元に刃を突きつけた藍である。この剣幕で彼女に詰め寄ったのでは、スパッと三枚におろされかねない。

真朱の後ろを見れば案の定、微笑を浮かべた藍が剣に手をかけていた。

月白は眼前の目標物（真朱）しか認識していないらしく、藍の穏やかな威嚇は全く目に入っていない。

学べよ！と叫びたいのは、もちろん月白にだ。

「ふふっ」

ぎりぎりの理性で堪えた丁子のすぐ脇で、今度は淡藤が小さく噴き出した。

場の中心が緊迫しているだけに、既に傍観者となっていた彼だが、どう見たって笑う状況ではない。

兄弟揃っての空気の読めなさに、とうとう丁子は頭を抱えた。

混沌としかけた場を救ったのは、外からの声だった。

「お嬢さま、妙でございます」

「妙どの！」

真朱の許可はとっていなかったが、とにかくこの空気を変えることを優先して、丁子は扉を開ける。

「お茶をお持ちいたしました」

「ありがとうございます。真朱さま、お茶ですよ！」

この際、行儀など無視して明るい声で言うと、月白は毒気を抜かれたように腰を落とした。

藍も、表情はそのまま剣を放す。

「妙」

「はいはい。失礼いたしますね」

真朱が顎を引くと、妙は礼儀的に平伏し、月白から順に茶杯を配った。

空いた盆は丁子が預り、妙はまた礼をして退出する。

緊張が緩和されたところで、月白は気まずそうに目を泳がせ茶をすすった。

詳しい話も聞かず、いきり立ったのを恥じてはいるらしい。

単純な性格を自覚しているのは結構だが、ならば余計に自制してもらわねば困るのだ。

主に丁子の精神衛生上。ただでさえ厄介な主人を抱えているのに、これ以上振り回されるのは遠慮したいと言うのが、丁子の偽らざる本音であった。

そして、真朱の側にいると決めたからには、それが叶わぬ願いだということも、残念ながら分かっている。

真朱は茶托に杯を置くと、仕切り直しに咳払いをした。

「とりあえず訊いておくけれど。私を議会に引っ張り出して、どうやって私を王座につけるの？」

「それは……まず少数でも反王弟派の貴族を説得して」

「ちがーう」

子供が癇癪を起こすように袖を振った真朱は、ズイツと月白に顔を

寄せる。

「私が朱華の娘と言って、誰が信じる？」
そして低い声でこう言った。

「鴉^{からす}の承認なくして、王は王たり得ない」

意識するから競いあう

「カラス？」

丁子の呟きを拾ったのは、一人だけ我関せずで茶を飲んでいた淡藤だった。

彼はちらりと丁子を見遣り、小さく笑う。

真朱に向けていた笑みと比べれば、若干ぎこちない気もする。が、範囲外でもそれなりに扱おうと思ひ直したらしいところは、評価するべきだろうか。

先ほど見事に存在を流された身としては、これしきのことではだされたくない。しかし美形が放つ微笑みは、丁子のささやかな意地など簡単に吹き飛ばしてしまった。

「……何ですか？」

丁子は淡藤がこちらを見たことに対して訊ねたのだが、彼は『カラスとは何か』と言う問いだと解釈したようだ。

愛でていた茶杯を下ろすと、淡藤は片手を後ろについて半身に構える。

「八咫鴉。王族の真贋の判別を司っている……役職と言うのか、人物と言うのかは微妙なところ」

「…偉い人なのですか？」

「王の戴冠式にはその人の印が必要だと、法律に書いてあるんだ。ただ、偉いと言う概念では括れないかな」

「淡藤、国家の機密をあっさり喋るな」

こそそと交わっていた会話は、そう広くない客房ではしっかり聞き取られていた。

たしなめられた淡藤は、開き直って兄を仰いだ。

「貴族ならたいい知ってることだよ、兄さん。機密と言うほどでもない」

「……侍女どのは貴族ではないだろう」

月白が眉間にシワを寄せる。

ぼそりとした呟きは、丁子の生まれをあげつらつてのことではなく、それを指摘するか否かをためらった結果だ。

淡藤は月白の物言いが気に障ったようだが、迷いながらも事実を正そうとする姿勢は、彼の四角四面な性格をよく表している。

丁子は苦勞しそうな性格だと思っただけで、不快ではなく、月白の発言については黙っていた。

だけれども、刺客はすぐ側にいた。

「別にいいじゃない。それくらい」

「……貴方はまた余計なことを」

うんざりした表情で月白が真朱を見る。

彼女はそれを無視して後ろに控える藍に同意を求めた。

「私自身が国家機密のようなものだしねえ？」

「今さら一つ二つ増えたところでなあ？」

「確かに言ってる。それに、郎女どのが許可したことなら、兄さんが口を挟むことじゃあないでしょう」

終いには淡藤まで加わり、数の上でも敗色濃厚となった月白は、これ見よがしに嘆息した。

丁子としては、信濃から教えられていないことだったので、八咫鴉に関することは確かに機密なのだろうと思った。が、教えてもらえるのならもちろん聞きたいので、敢えて口を挟まない。

そして淡藤の言葉通り、真朱が『よい』と言ったことに対して、臣下である月白が抗議することはできなかった。

「どうぞ殿下のご随意に」

月白は難儀な思考に覆せない身分で折り合いをつけ、せめて快く思っていないことを示すよう捨て鉢に言った。



「では譜言（ふげん）内侍、また何かあれば来る」

姉である松葉が暮らす大慧（だいけい）殿の門前で、王弟は一人の老人に告げた。

暗い色目の袍を身に付けた小柄な老人は、黙ったまま首肯で王弟に応える。

彼は自分の宮に引きこもる女王と外との取り次ぎ役を担う、唯一の内侍であった。

王弟の手には、緻密な螺鈿細工が施された漆器の文箱。中身は今朝がた可決された、増税法を公布する勅書だ。

正式な法の公布には王印が必要であり、王弟は松葉にそれを捺させて来たのである。

捺させに、と言っても無理強いしている訳ではない。

父王や甥、娘が相次いで逝き、前宰相の伊勢仙斎（せんさい）まで喪った松葉はここ数年で老け込み、弟と争おうなどと言う気概を失ってしまっていた。

もとより気の弱さには定評のあった姉である。弟から王位をかつ浚ったのも仙斎の後ろ楯があつてこそ。

それがなくなった今、姉は信の置ける者たちだけを側に配し、王宮の奥にある小さな宮から出てこなくなった。

時折訪れる王弟を恐れている節さえあり、彼が何も言わなくとも王

印を差し出すのだ。

そんなに嫌ならばさっさと譲位してしまえ、と齒噛みしているのだが、姉は弟に玉座を明け渡すつもりはないらしい。

その気になればいつでも廃位を迫れる立場の王弟である。しかしそれをするにはもう一人、どうしても首を押さえなければならぬ者がいるのだ。

大慧殿から南に下り、本来の王族の私的空間との境である西内殿の門を潜ると、二人の密偵が出迎えた。

この門から大慧殿の側へは松葉の許可がなければ立ち入れないため、門の外で待っていたのだ。

まだ十代半ばほどの少年と、もう一人は柏木である。

「浅葱の動向は」

「はい。本日は体調が優れないとかで、屋敷から出ておりません。また、外出の予定もないとのこと」

「決議は必ず“病欠”だな。小賢しい」

王弟は彼らを横目で見て、優先事項を訊ねた。

「鴉はまだ見つからぬのか」

「申し訳ございません」

「どれほど時間を与えたと思っている」

冷やかな叱責に、少年が肩を強張らせる。

「畏れながら申し上げます」

「何だ」

柏木が言葉を挟むと、王弟は鷹揚に応じた。

「八咫鴉は倭の身分制に関わらぬ身。次代を捜すことは容易ではございませぬ。譜言内侍がそうであると言うことも、陛下の即位の折りに判明した次第でございますゆえ」

「譜言め……」

王弟は袍の袖を翻し、たった今自分が歩いて来た方向を見遣った。

倭には何百年にも及ぶ王族の系譜を記録し、王位の継承順位を正しく定める役を負う家系が存在する。

八咫鴉とは、云わばその生ける王家の家系図だ。

また、新しい王の即位には八咫鴉の印を捺した証書がなければならぬと古からの法で決まっていた。つまり王弟が即位するためには、八咫鴉の印が必要なのだ。

それだけ聞くと王をも凌ぐ権力を持つようだが、鴉はその二点以外で政治に関わることはできないとも決められている。

表舞台に立つこともなく、個人については一切その情報を公開されないため、王族の自作自演ではないかと、存在自体を疑問視する声も少なくなかった。

しかし姉が即位するにあたり、王宮で舎人（とねり）を務めていた男が鴉の印を持って現れた時は、どの貴族も驚愕したものだ。

その舎人であった男と言うのが、先ほど大慧殿で王弟を見送った、譜言と号する老人である。

では譜言を押さえればいいかと言えば、厄介なことにそうではなかった。

肝心の印綬を、譜言はもう持っていないのだ。

「譜言内侍が声を封じてしまわれた以上、しらみ潰しに捜すしか方法はございませんぬ」

「今しばらくの猶予をいただきたく……」

まるで小さな子供が親の背に隠れるように、少年が柏木の陰から願い出ると、即座に王弟から睨まれた。

「……柏木」

「はい」

「身内の不始末はお前の責任だ。浅葱の監視と共に鴉の搜索も申し付ける」

「仰せに従います、殿下」

王弟を見送った後、作揖を解いた少年が柏木を窺う。

「ご迷惑をお掛けして、申し訳ございません……」

柏木はため息混じりに少年の額を突いた。

「お前には荷が勝ちすぎたのは事実だ。後見としての責任は取る」

「伯父上え……」

「情けない声を出すのではない。どこまで調べたのだ」

柏木が大腿で歩き出すと、少年もそれを追いかける。

「譜言内侍に婚姻歴はありませんでした。鴉は一子相伝なので次代は子か孫だと思われませんが、私生児ですと特定が難しく……」

「それで？」

尻すぼみになる言葉に固い声音で促すと、柏木の甥は慌てて先を続けた。

「ただ役柄、王族に近い人間かと思われるので、まずは陛下の即位と同時期に仕官を始めた者と、不審な異動があった者から調査を行っています」

「……分かった。お前はそのまま続けろ」

「はい。……伯父上は？」

「私は別の方面から捜す」

世界は未完のまま進む

別件で寄るところがあると言う伯父と別れた少年は、一人で西内殿の端を歩いていた。

すぐ右には居院（すまい）の高欄があり、左手には遠くに塀が見える。

立ち入りを制限されているために人気のない庭は、西内殿を横切るのに最適なのだ。

見習いとは言え、少年も密偵の端くれ。官吏が通る道を堂々とは歩かない。

「そこのお前」

突然降ってきた声に、少年は砂利を踏みしめた足を止める。

「え？……え？」

「こちらだ」

辺りを見回すと、また上の方から呼び掛けられた。

見上げた高欄に寄り掛かり、男が一人立っている。その顔を確認して、少年は飛び上がりそうなほど仰天する。

「い、和泉さま!？」

「喧しい」

顔をしかめたのは、王弟の息子だった。

「お前、柏木の身内だな。名は？」

「……霞でございます」

「上がって来い」

その場に平伏した少年——霞を、蘇芳は高い回廊の上に呼び寄せる。

「いえ、それは……」

「構わぬ。早くしろ」

「……はい」

礼節と命令を天秤にかけた上で、霞は軽い動作で回廊に登る。礼は相手に敬意を表すもので、拘りすぎて相手を不愉快にさせたのでは本末転倒だからだ。

上がってから再び平伏するべきか迷ったが、呼び寄せられたからには話があるのだろうと拱手にとどめる。

正直なところ、霞にはこの蘇芳と言う青年の立場がよく分からなかった。

父は女王の弟で、母も遠縁ながら王家の血を引くと言う生粋の王族のはずなのに、蘇芳は倭の姓を名乗っていない。

そこだけ見れば蘇芳は王子ではない。ところが彼は王弟と同じく、王族の居住区である西内殿に自由に出入りしているのだ。

定まらない身分に困惑しているのは貴族たちも同様で、蘇芳の敬称は“殿下”でも“どの”でもなく“さま”であると、暗黙のうちに決められていた。

その蘇芳は右手を顎に当て、上から下まで霞を眺めている。

「お前は近頃、よく禁裏で見かけるが……密偵の身内が役所に勤めている訳ではあるまい」

「左様でございます」

「では何をしている」

「それは、その……和泉さまはご存知なくとも、差し支えなきことでございますゆえ」

霞が言葉を選びながら答えると、蘇芳は表情を翳らせた。

「お前も、そう言うのだな」

「は……?」

「私の周りの者は、口を揃えて言う。下々のことは知らぬままでよい。父上に任せればよい。とな」

首を傾け、目を伏せる様は悲哀に満ちていて、霞の罪悪感を煽る。

「私も父上のお役に立ちたいのだが……まだまだ力不足だと言うことであろうな」

力なく呟かれた言葉に、霞は深く同調した。

伯父の役に立ちたいのに、現状ではむしろ足を引っ張っている自分が情けない。

同時に、高すぎる身分のせいで目や耳を封じられている蘇芳に同情もした。

王弟の一人息子である蘇芳は、将来の王位を期待されている。そのため今は下手な役職にも就けず、飼い殺しに近い状態なのだ。

そんな中で、耳くらい自由になってもいいのではないかと霞は思った。

「――王弟殿下の命により、八咫鴉を捜しております」

「八咫鴉と言うと、譜賢内侍の？」

「はい。八咫鴉は世代交代をする、声を封じる習慣がございます。現在は譜賢内侍の身内が、その役を負っているかと思われまので、それを内密に探し出すようにと」

「何故？」

「は……？」

蘇芳の問いが、霞には分からなかった。

密偵は主の命令によって動く駒。命令の理由など考えない。詮索しない。ただ主の与えられた役目を遂行するのが使命だからだ。

よって、霞も王弟が何を思って八咫鴉を探すのかなど、考えたこともない。

「王弟殿下は、ヒースガルドとの開戦を望んでおられるとのこと。一刻も早く王位を欲しておいでなのではございませんか？」

王弟の立場では大臣たちを動かしても、軍は動かせない。勅命を出すには王位が必要なのだ。

「姿の分からぬ者を探すより、伯母上を脅して讓位させた方が早かろう」

そもそも、八咫鴉の役目は次の王を決めることであり、今の王が決定した讓位を覆すことはできない。

尤もな意見に頷きながらも、霞はそつと異論を挟んだ。

「それは……鴉が浅葱どのを次の王に指名するのを防ぐためでは？」

「浅葱は臣下の身ではないか」

「しかしながら、前王の実子である浅葱どのが指名される可能性も……」

霞の言葉を、蘇芳が片手を挙げて制す。

「伯母上が即位した時、譜言は浅葱ではなく伯母上を認めた」

当時、既に人格の優れていた浅葱を臣下とした仙斎の意見を黙認し、気弱な松葉の即位を承認したのである。

その経緯から考えても、今さら八咫鴉が浅葱を指名するとは考えにくかった。だとすれば、次の王位は順当に王弟に回ってくるはずだ。しかし彼は、水面下で八咫鴉を探している。

それはまるで――。

「……どうあっても自分は選ばれぬような態度だな」

不穏な呟きの後、蘇芳はしばし沈黙した。

（選ばれない……？）

王弟は、自分が王になれないと思っているのだろうか。

それでは、王になるために画策を巡らせている行動と矛盾する。

どう言うことかと首を傾げた霞に、更に蘇芳が尋ねた。

「霞、父上が鴉を探し始めたのはいつ頃か、知っておるか？」

「確か……二年ほど前かと」

霞が伯父について王弟に拝謁してすぐのことだ。彼が最初に命じたのが霞であれば、それは二年前だ。

「王太后がお隠れになった頃か」

先々代の王の正妃――つまり松葉の母であった王太后は、夫が崩御した後、王宮を離れ隠居していたが、離宮で逝去している。

数人いた王の妻たちの中でも、正妃ながら目立つ存在ではなく、最後まで控え目な存在だった。

生前の希望で密葬だったこともあり、恐らく国民の大多数が喪中だと言ふことも知らないだろう。

蘇芳でさえ、父が王太后の今際に呼ばれなければ、その最期も知らなかったはずだ。

「そう言えば、その頃からであったか。父上がヒースガルドとの開戦を進め始めたのは」

その頃を思い出しながら、蘇芳は指で顎をなぞる。

「……分からぬな。父上は何をお考えなのか」

唸って、蘇芳はため息をつく。そして高欄に凭れかかり、霞に退出を許可した。

「苦労であった」

「失礼いたします」

下がれと命じられたからには、抱いた疑問もそのままに下がるしかない。

霞は礼をとって庭に降りた。

「ああ、霞」

「はい」

思わず見上げた蘇芳は、高欄に肘をついて手を振っている。

「私はこの刻限であれば、大抵ここにいます。また手が空いたら参れ」

「は……」

「せっかく“耳”を手に入れたのだ。重宝させてもらおうぞ」

「は、はい」

最後に王弟そっくりの笑みを見せた蘇芳に、霞は口元がひきつった。

王弟は自分でなく、よく似た息子が王に指名されるのを恐れているのかもしれない。

脳裏に浮かんだ霞の思考は、正に事実の一端として正しいものだったのだが、彼がそれを知るのは後のことだった。

愚者の足音は高らかに響く

「声を封じる？」

「八咫鴉は役目を引き継いだ後は、次代を特定させないために沈黙を守るのが慣習なんだ」

夢見亭の客房では、にわか八咫鴉講座が開講されていた。

講師はもっぱら淡藤であり、真朱らはこちらを生温い目で眺めながら茶をすすっている。

その三人だけ見れば、茶飲み友達が集まっているように見えなくもないが、なにぶん横で交わされる話題が物騒だ。

「それは……抽象的な表現としてですか？」

「個人によって色々だね。単に声を出さないだけの人もいたし、実際に喉を潰した人もいる。先代の鴉は後者だったかな」

「潰し……」

生々しい想像をしてしまい、丁子は顔色を悪くする。

「そこまでして、八咫鴉は秘密にしなければならいのですか？」

「八咫鴉を手勢に引き込むことができるなら、王位は思う通りに動かせるよね」

そっけない答えに彼女の肩が下がり、それを見た淡藤は眉を寄せた。

「申し訳ありません」

不満が伝わって気分を害したかと、丁子は慌てて背を伸ばす。

「いや、別に怒った訳じゃあなくて……」

「はあ……」

「——とにかく、次の八咫鴉が誰かを聞き出そうとしても、先代は口にできないと言う訳」

一つ咳払いをして、淡藤が強引に先を続けた。

何が気に障ったのかは分からないが、流したがっていることは感じ

られたので、丁子も深く突っ込まないことにする。

あまり他に気をとられると、話の内容を見失ってしまいそうだった。丁子は今までの内容を口に出して確認した。

「では、八咫鴉と言う人に承認されなければ、継承権を持っけても王位にはつけない、と」

「そう。近代はたいてい、長子相続で問題なく認証されて来てるけどね」

性におおらかな倭では、一家の長となる者は数人の妻、もしくは夫を持つことが認められている。

近代以降、国民のほとんどが単婚となったが、貴族社会ではいまだに一夫多妻、一妻多夫の風潮が残っていた。

王室もまた例外ではなく、むしろ貴族よりも跡継ぎを必要とする背景があるだけに、歴代の王はたいてい複数の相手と関係を持っていた。それを認めるがごとくの制度が、王族にはある。最たるものが王位の継承権だ。

外国の者との混血児の場合を除き、おおかたの子は父母の身分に隔たりなく、継承権が与えられる。どんなに血が薄くとも、王族であれば王になる権利はあると言うことだ。

重要なのは王の血を継いでいることである、と言う考えである。逆に言えばどれだけ人格が優れていても、血を受け継がない者は王にはなれない。過去には仁徳あふれる王子だった長子が承認されず、その下の放蕩王子と呼ばれた弟が八咫鴉に指名されたこともあった。後にその長子は、側妾の不義の子であったことが発覚したと言う。

八咫鴉は王の血に連なる者を全て記録する。恐ろしいことに、そこに一切のごまかしは利かないのだ。

貞操観念の低い倭において、王家の血筋を存続させて来たのは、間違いない八咫鴉である。

「真朱さまが王弟殿下を抑えて王位につくためには、八咫鴉に承認されなければならない」

「そうだね」

「ですが閣下が仰せになったように、王女としての地位を求めるだけであれば、八咫鴉の承認は必要なのでは？」

八咫鴉が出てくるのは王の交代時のみ。つまり、不義の子が王子や王女を名乗ることについて、彼らは全く関知していないのだ。

ただ、偽りの血を持つ者が即位するのを直前に止めるだけ。

わざわざ混乱を招くような八咫鴉の役目に疑問はあるが、今回に限っては有益だ。

要は女王に真朱が孫であると公言さえさせられれば、彼女は王位継承権を得ることができる。

「なるほど。君は存外、賢いんだ」

さらりと失礼な感想をのたまって、淡藤は真朱へと目を移した。

「……女王に接触できなければ、意味のない方法だけれど」

こちらを振り返った真朱に笑顔で断じられ、所詮は浅知恵かと丁子は息を吐く。

「しかし、侍女どのの言うことも一理ある」

意外な助け船は月白からだった。

「陛下に一度だけ、朝議にお出ましただくだけでいい。公言さえされてしまえば、それは宣下と同じ意味を持つ」

宣下？と首を捻ると、王が子供に王子か王女の身分を与えることだと月白から注釈が入る。

本題から逸れまくっている会話に、やきもきしていたらしい。

彼はこの機会を逃すなとばかりに主張した。

「宣下がなされたら、貴方の継承順位は王弟より上に来る」

丁子は知らなかったことだが、継承権と継承順位は別物であるらしい。

生まれに関係なく与えられるのが継承権で、王に近い血筋から振ら

れるのが継承順位。

王位の継承は兄弟より直系の子孫が優先されるため、女王の孫である真朱が順番として一位に来るのだ。

「ナンセンス」

勢い込んだ月白に水をかけたのは、興味の無さそうな様子で控えていた藍である。

「どう言う意味ですか？」

「馬鹿馬鹿しいこと、または無意味なこと」

藍が答えると、真朱もそれに頷いて同意を示した。

「今の議会で、女王が宣下を押し通せると思っているの？随分おめでたい頭だね」

たった二回しか顔を合わせていないのに、月白が敗北するのは何度目か。

「王宮で動けば必ず王弟に勘付かれる。そうしたら女王に諮る前に消されるよ」

「そこまで、今の議会は殿下の独裁なのですね」

「王制自体が一種の独裁だとも思うけれどね」

「倭は議会によって王に提出する法案をまとめるんだ。独裁とは違う」

月白は諦め悪く食い下がるが、それが建前論であることも分かっていた。

「最終判断は王にあるのだけれど……。まあ、その議会とらが正常に機能していないなら、まさに独裁だよ」

「だから、この国を変えるためには貴方に次期女王となってもらうことが必要で、そのためには八咫鴉が必須だと言っている！」

「ですが、肝心の八咫鴉が正体不明なのですよね」

丁子が言い添えると、月白は額が床につくのではないかと言うくらい落ち込んだ。

出来の悪い生徒を見るような目で月白を眺めた真朱は、ふわりと広がる袴の片膝を立てて、脛の辺りを抱え込む。

そして、鬱々と頭を垂れる月白に尋ねた。

「そもそも、あなたは自分の目的を忘れたの？」

「私の目的？」

彼は束の間、考える素振りを見せた後、恐る恐る――まさにその表現が当てはまる様子で――答える。

「王弟が開戦の準備を整える前に、貴女が存在を公にして止めたいと言った、そのことか？」

自信のない解答を求められた生徒よろしく引き気味の宰相に、真朱は細い人さし指を立てた。

「つまりあなたは戦争を回避したいのでしょうか？ ならば、私が王になるのは手段の一つでしかない」

「手段……」

「私としては、あなたが何故、私の即位にばかり拘るのか理解に苦しむところだよ」

真朱は本当に分からないと言った表情だ。

その言葉を聞いて、呆然としていた月白の目が輝く。

「……あるのか。他に方法が」

「ひとつ、軍部を味方につけて、王位を篡奪する」

「ふざけるな！ それではただの謀反ではないか！！」

怒鳴る月白を無視して、真朱は二本目の指を立てる。

「ふたーつ、王弟が不慮の事故で逝去する」

「私は真面目に訊いている！」

そして三本目。

ずっと真朱が目を細めた。

「みつつ。――開戦の前にヒースガルドとの不侵条約を結ぶ」

仮初めなら、いない

「不侵条約……」

三本の指を眼前に突き付けられた月白は、ゆっくりと繰り返した。

「不侵条約でも和平条約でも構わない。とにかく、国際規定に乗っ取った平和的条約を結ぶ。それも開戦の前に」

不侵条約も和平条約も、国家間で戦争をしないことに合意して結ばれる協定だ。条約締結の場には中立の立場として第三国の立ち合いが必要となり、成立した条約は法的な拘束力を有する。破れば当然、国際社会から厳しい批判を受けることになる。

「国内……それも王宮内で動けば、必ず王弟の子飼いに察知される。けれど、国外の更に水面下でなら、まだ危険度は低い」

国内へはいくらでも圧力をかけられる王弟だが、体裁を取り繕わなければならぬ国際社会では、目立ったことはできないからだ。

「条約となるとヒースの首脳陣との折衝が必要になる。戦争を仕掛けようとしている相手だ。陛下との接触より遥かに難しいだろう？」

「そうでもないよ、兄さん」

「藤？」

「ヒースから宝石商が来ると言ったよね？ヒースとの国交は正常だよ。戦争をしたがっているのは王弟だけ」

つい先日、ヒースからの客人を招いての夜会に出かけるのを見送ったのは月白だ。

それから顔を合わせていなかった淡藤が、何故かこうして夢見亭にいる。

「王弟はギリギリまでヒースに勘付かせない目的があるのだろうけど、おかげで向こうと接触しても不自然じゃない」

そこまで言われれば、さすがの月白も弟がここにいる理由に察しが

つく。

「お前まさかヒースガルドに……？」

「ついこの間も行ったけれど、今回は別。僕は仲介を頼まれたただだよ」

艶やかに微笑む淡藤は、月白より余程、真朱に買われているようだ。「開戦云々はまだ水面下。貴族の中でも王弟に近い者くらいしか知らないことだから、こちらも知らぬ振りが通る」

言われてみれば。浅葱から聞かされなければ、月白も王弟が隣国を攻めようとしていることなど気付かなかったに違いない。

「よかったね。王弟が影でコソコソしてくれているおかげで、貴方は堂々と動くことができるよ」

「ちよっと待て！ 私が動くのか！？」

「貴方以外に、交渉の席につける人間がいるの？」

女王が表に出られない場合、国政の決定権は宰相が持つのが普通だ。しかし任官した時から王弟の仕切りに任せてきた月白は、当然、重要な判断を委ねられたことがない。

情けない話だが、本当にお飾りでしかなかったのだ。

「……浅葱とか」

「あの人には王弟の監視が張り付いていて使い物にならないよ。貴方は、自分が宰相だって言う自覚があるの？」

「それは、その……」

月白が及び腰になるのを、真朱は鼻で笑った。

「『私が動くのか』なんて、信頼の置ける手足を持つ者が言う言葉だよ。貴方に藍のような存在がいるのなら別だけど」

「う……」

ちらりと視線を上げれば、藍は呆れ顔で肩を竦めた。

「そりゃ大層な誉め言葉だな。どれだけ働いても謝辞の一つも言わないんだから。俺が力不足なのかと思ってた」

「藍を使わないのは宝の持ち腐れだからね。心配しなくても、これからも働いてもらうよ」

「まったく。諜報までやらせといて、まだ物足りないってか？人使いの荒い主に捕まったもんだ」

「自分で居着いたくせに」

会話から察するに、藍は密偵としても動くらしい。となれば、彼は月白でも側近に欲しいと思う。

口は少々悪いが、身のこなしと所作は十分信頼に足るものだし、身の回りの世話から時に危険と隣り合わせの諜報活動もできる。親しみと忠心が矛盾なく内包される主従関係は、多くの者にとっての理想だ。

少なくとも、全てを兼ね備えた者は、月白の周囲にはいない。

「兄さんの従者は、幼少の頃からの世話係って言う側面が大きいものね」

「王宮で信頼の置けるお友だちでも作っていれば、こんなことにはならないんだよ。それが見事に孤立なんてしているから、ツテもないでしょう」

「それは無理だよ、郎女どの。兄さんは友だち作るの苦手なんだから」

また藤が余計なことを言う。

だが、それには月白も反論したい。

なにせ月白が王宮に出入りするようになった頃には、既に王弟の独裁政治が始まっていたのだ。祖父が王弟と対立していたために、彼の不興を買う危険をおかしてまで、孫である月白と親しくしようと言う者はいなかった。

おかげで今や、王宮や議会では孤立無援の状態なのである。

いっそのこと、弟のように政治に関わらなければ状況は違っただろうが、伊勢の家を継ぐ者として選択の余地はなかった。

黙った月白に、淡藤が眉尻を下げる。

「大丈夫だよ、兄さん。そのための“仲介”だからね」

「……お前の仲介は、嫌な予感しかない」

呟いて、月白は一度深く息をついた。近頃はそればかりな気がする。

溜め息をつくと幸せが逃げると言う。逃げ出したものは首に縄をつけてでも連れ戻さなければ、割りに合わないことになりそうだった。

はじまりの色が舞う

その後、『お腹が減った』と言う真朱の一言で、場は会食の席へと移された。

淡藤は遠慮して帰ろうとしたが、話が途中だと真朱に引き留められている。

月白としても、ここで弟に帰られては心許ない——ではなく、話がややこしくなるので居てもらわなくては困る。

元より月白を招く建前だったからか、夕食は豪華なものが並んでいる。淡藤が増えたところで困らなかったようだ。

「これは何？ ちょっと辛いね」

「牛と野菜を炒めて、塩と胡椒で味をつけてあります」

料理を取り分けたりと給事をする傍ら、丁子が淡藤に捕まっている。

「胡椒？」

「はい。倭の伝統的な料理には、あまり使用されない香辛料かもしれません。発祥は吐晏だと聞いております」

「吐晏とは、あまり交易がないはずだけど、王都まで普及してるの？」

「それは……」

料理以外のことは対応できる範疇にないのか、丁子が答えに詰まった。

視線で助けを求められた藍は、

「ウチの料理人が南の地方出身なんだ。国境近くの村だから、倭と吐晏の文化が混ざってるらしい」

「へえ。これは国内で流通させれば売れるかも」

「残念ながら、国内に行き渡るほどの生産力は、あの田舎にはない

な」

「小さな村だからね」

真朱たちが和やかに円卓を囲んでいる間、月白は一人で別の思考に耽っていた。

目先の問題に限るなら、最善なのはヒースガルドとの戦争を避け、できるなら王弟の権力を削ぐこと。最悪はこのまま開戦を止められず、両国に被害が出ることだ。

つまり、真朱の言う通りにヒースと不侵条約を結べばとりあえずこちらの勝ち。逆に、要である彼女の存在が露見して王弟に手を下されたら負け、と言うことになる。

開戦を避けられても王弟の権力は削がれないし、負ければ失脚どころの話で済まない。

分の悪い勝負にためらう一方で、己の力不足は認めなければ仕方がないことも、既に分かっている。どう言い繕ったところで、ない袖は振れないのだ。

「それで、具体的にどんな策を考えているんだ？」

まずはそれを聞いてみようと思ふと月白が箸を置くと、真朱は匙の先をくわえて小首を傾げた。

凶悪なほど可愛らしい仕草に、胸が高鳴る――が、やはり彼女は外見を裏切りまくる性格だった。

「少しは自分で考えられないの？ その頭は何のためについているのかな」

腕を組んだ真朱の、ちっとも可愛くない瞳が月白を睥睨する。

「もう少ししっかりしてくれると嬉しいね。貴方を動かそうって言う私の思考が疑われるじゃない」

「な…にを…」

（このガ——いや待て、これでも王孫だ。ガキはまずい）

卓の下で袴を握り締め、月白はひきつる口元を無理やり上げた。

「完璧な駒扱いに聞こえるんだが」

「貴方は私の下僕でしょう。忘れたの？ 貴方の血筋と肩書きだけは、十分に利用できるんだからね」

（このクソガキっ！！）

よく分かった。この生意気な子供に遠慮は必要ない。

駒でも下僕でも言うがいい。その通りに動いてやろうではないか。ただし開戦が回避できたなら、その後は王弟を失脚させるのに彼女を利用してやる。

本人にその気はないようだが、真朱を次期女王に仕立ててしまえば、王弟の権力を削るのに役立つはずだ。

そのために、頭くらい下げてやろうではないか。

「大変に申し訳ないことでございますが私では力不足で殿下の期待に十分応えることができませんこの下僕めにその考えをご高説賜りたく存じますがっ」

一息で言い切って、月白は真朱を睨んだ。

「……………」

暫時、部屋を沈黙が支配する。

「……丁子」

「は、はい」

ことりと匙を置いた真朱が、侍女を呼ぼう。

「今のを何と言う？」

「……い、慇懃無礼、ですか？」

ぼろりと溢れた丁子の言葉をきっかけにして、淡藤が笑いの発作を起こした。

「あははははっ！ 兄さんがキレた」

「黙れ藤！」

捨てきれない羞恥心に顔が熱くなるのを感じた月白は、照れ隠しに弟を一喝した。

しかし淡藤は八つ当たりを受けてなお笑い続け、しまいには目尻の涙を拭う始末である。

「ふふっ……兄さん、情けないなあ……ふっ」

「うるさい、黙れ、自覚している」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8863t/>

夢見亭のお嬢さん

2011年11月27日09時50分発行